



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ゲルツェンの『向う岸から』について
Author(s)	外川, 継男; Togawa, Tsuguo
Description	Brilliant in the style and original in the thought, Herzen's 《From the Other Shore》 has been regarded as one of his best works. At the same time, this work is the most complicated in its structure and very contradictory in its contents. The whole book can be divided into two parts : the part of dialogues and that of articles. In the first part, the conversation is held between the realists and the romantists. Although Herzen has mentioned in his autobiography, we can not consider the romantic "young man" in the chapters 《Before the Storm》 and 《After the Storm》 as I.P.Galakhov, Herzen's friend, and the realistic "middle-aged man" as Herzen himself. In the chapter of 《Consolatio》, neither "the doctor" nor "the young lady" expresses directly Herzen's own opinion. The two types reflect Herzen's own thoughts and doubts, and he wished to give them an expression in the style of the dialogue. The conversation, therefore, is nothing but his inner dialogue. In order to understand the organic structure of the whole book, and to know the development of Herzen's thoughts, we must analyze in detail the contents of all chapters and the interrelation of them.
Citation	スラヴ研究, 13, 1-35
Issue Date	1969
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4994
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112908.pdf



ゲルツェンの『向う岸から』について

外 川 継 男

はじめに

ゲルツェンの作品『向う岸から』については、ロシア(ソ連)本国をはじめ諸外国においても、いままでにすくなからぬ研究があらわされており¹⁾、わが国においても筆者が知るかぎりこれまでに四人の研究者がそれぞれの角度からこの作品を論じている²⁾。このように多くの研究者によって問題にされてきたということ、とりわけ近年になってあらためてこの作品がとりあげられるようになった³⁾ということは、それなりの理由がなければならぬ。

いうまでもなく、その第一の理由は、『向う岸から』が作品としてすぐれたものであるということである。この点についてはゲルツェンその人も、「わたしはこれ以上すぐれたものは何ひとつ書かなかったし、またこれからも書かないであろう⁴⁾」と、長男アレクサンドルへの献詞の中で言っているが、この言葉からも作者自身いかにこの書を自負していたか、うかがい知ることができるというものである。

多くの研究者の中でも、たとえば19世紀のロシア社会思想史の流れを *антимещанство* という概念を基準にして、インテリゲンツィアの歴史としてとらえたイワノフ＝ラズムニクは、その名著のほまれ高い『ロシア社会思想史』の中で、本書を「天才的な作品」と呼び、このような作品は19世紀ロシア文学史の上でも多くはないと激賞した⁵⁾。また近年においては、ゲルツェンの思想形成のプロセスをきわめて明快に分析したマリアが、その著『アレクサンダー・ヘルツェンとロシア的社会主義の誕生』の中で、本書がゲルツェンの全著作の中でも(自伝『過去と思索』を除いて)文学的にもっともブリリアントなものであり、哲学的にも、もっともオリジナルな作品であると、高く評価している⁶⁾。このよう

- 1) А. И. Герцен, Семинарий, М-Л, 1965 参照。これには欧米の研究はあまりくわしく出ていない。この点については拙稿「ゲルツェン研究覚書」、『ロシア史研究』, Vol. III, No. 2) 参照。
- 2) 勝田吉太郎, 「ゲルツェンのナロードニチェストヴォ」, 『近代ロシア政治思想史』, 昭和36年, 所収および『革命とインテリゲンツィア』, 昭和41年, 第1章, 第6節, 「『進歩』に対するゲルツェンの反逆」。
松田道雄: 「日本およびロシアの初期社会主義」, (桑原武夫編『ブルジョワ革命の比較研究』所収)。
松岡 保: 「ゲルツェンと二月革命1, 2」, 『関西大学経済論集』, 第16巻1号, 6号。
松原広志: 「ゲルツェンの『ロシア社会主義』論の成立」, 『史林』, 第504巻, 4号。
- 3) *Slavic Review* の1966年6月号は「ゲルツェンとキェルケゴール」というテーマで誌上討論会を行なった。これは野心的な企てであったが結果は尻切れとんぼに終わっている。
- 4) А. И. Герцен, Собрание сочинений в тридцати томах, Т. VI, М. 1955, стр. 7. 以下においてはこの版の巻数をローマ数字で頁数をアラビア数字で記す。
- 5) Иванов-Разумник, История русской общественной мысли, Т. I, 3-е изд. Спб. 1911, стр. 393.
- 6) M. E. Malia, *Alexander Herzen and the Birth of Russian Socialism, 1812-1855*, Harv. Univ. Press, 1961, p. 376.

な賞讃の言葉はほかにもかす多く見出すことができようが、このオリジナリティーという点で、近代の哲学や社会思想の流れの中で本書の占める位置をもっとも的確に定めたのはバーリンであろう。彼は概して19世紀ロシアの政治・社会思想については、そこにオリジナルなものはあまり見られないという意見の持ち主であるが⁷⁾、ゲルツェンの思想の持つオリジナリティーを、以下の如き近代思想のコンテクストにおいて把握する。

まず18世紀の啓蒙哲学の「進歩」に対するオプティミスティックな確信が、フランス革命によって打ち破られ、ここにドイツ・ローマン主義が登場する。彼らは人間社会が単なるメカニカルな集団ではなくて、個人の魂と同じように、内的構造を有するものであって、個人が知らないかもしれぬ目的をめざしているものと考えた。そしてその到達しうる唯一のゴールは歴史的発展の中にこそ存するのであって、ヘルダーはそれをさまざまな人種の文化の発達の中に、ヘーゲルは民族国家の発展に、マルクスは生産力の成長によって生まれ、規定される場所の階級闘争に見出したのであった。いずれにせよ、そこに共通にあったものは、(1) 宇宙はある法則に従っており、それは理性によって理解されるか、経験によって見出されるか、あるいは啓示されるかはとにかくとして、一つのパターンを示すものであるという確信。(2) 人間は自分よりも大きく強力な全体の中の要素であり、したがって個人の行動はこのような全体によって説明されるのであって、その逆ではないとの確信。(3) 「何をなすべきか？」という問いかけに対する答は、人間が好むと好まざるとにかかわらず含まれているところの歴史の客観的プロセスを知ることによって与えられるものであり、そしてそれは、そのゴールを真に知っているもの——すべての理性的存在にとって同一であるという確信。(4) この客観的に与えられているコスミックな目的を達成せんとする手段・方法は、すくなくとも究極的には悪や醜や愚ではありえず、逆にこの偉大な目的にさからうものは、悪であり、醜であり、愚であるとの確信が存した。しかし、このようなゴールが不可避なものであるかどうか、したがってまた進歩がオートマティックなものであるか否かについては意見が分かれる。あるいは反対に、人間はこれらのゴールを実現したり放棄したりするのを自由に選択しうるか否かについても意見は分かれる。しかし彼らは一様に普遍的な妥当性をもった客観的な到達点が見出しうるものであるということ、そしてこの到達点こそ人間のあらゆる政治的・社会的・個人的活動の唯一のプロパーな目的である点では一致していた。ところがゲルツェンはこのような時代の知的精華である偉大でデスポティックなヴィジョンに反対して、つぎのように考える。(1) 自然は計画に従うものでなく、歴史は脚本通りに進行するものではない。(2) 原則として、いかなる鍵も定式も個人や社会の問題を解決することはできない。(3) 一般的な解決は真の解決ではなく、普遍的な目的は決して真の目的ではない。あらゆる時代にそれぞれの地 (texture) があり、問題があるのであって、単純化や一般化は経験にとって代るものではない。(4) ある時、ある所にいる現実の個人の自由こそ絶対的価値である。(5) 自由な行動のための最小限の場はすべての人間にとって精神的に不可欠であり、これを永遠の救いとか、歴史とか、進歩とか、ましてや国家とか教会とかプロレタリアートとか、あれこれの時代の大思想が説く抽象的なものや一般的原理の名によって抑圧しては

7) I. Berlin, "Introduction" to *Russian Intellectual History*, ed. by M. Raeff, N. Y., 1966.

ゲルツェンの『向う岸から』について

ならない⁸⁾。

このようにゲルツェンの思想のもつオリジナリティーを性格づけたバーリンは、別の論文においてつぎのように書いている。

『向う岸から』は1848年の崩壊を、あのトクヴィルの有名な回想記の超然とした皮肉なムードでなく、また同じテーマについてのカール・マルクスの二つの論文のように、ある特殊な歴史理論を同時代の事件に適応するのともちがったやり方でとりあつかっている。」「……このエッセイは、少なくとも原文では、鋭利さ、アイロニー、イマジネーション、モラルの上での非凡さ、熱烈で、しばしば詩的な雄弁、そして洞察力に富む知力が、内的に洗練されたスタイルおよび感情と一緒に、作家としてのゲルツェンのパーソナリティーの特異な資質を形づくっていることを示している。これは革命の挫折の中で難波してしまった自由主義と民主主義の教義——および空虚な大言壮語——に対する *post mortem* として意図されたものであって、単に文のあちこちに散在する *pensées* として興味があるのみならず、現代においても完全に適合する諸々の見解をもったきわめてオリジナルな道徳および社会哲学の表現としても興味あるところの、倫理的および政治的思想を含んでいる。」⁹⁾「時代のするどい予言的な観察者として彼は、多分、マルクスおよびトクヴィルと比肩されるが、モラリストとしてはそのいずれよりも興味ぶかく、且つオリジナルである。」¹⁰⁾

バーリンはこのように作品『向う岸から』を高く評価し、これをもってゲルツェンの *profession de foi* であり、*testament politique* であるとまで言っている¹¹⁾。

このように本書は作品としてきわめてオリジナルなすぐれたものと考えられているが、同時に、マリアも言うように¹²⁾、きわめてその内容が「混乱した」「パラドキシカル」なものであって、まさにこの点にこそ多くの研究者をひきつける第二の理由があったように思われる。

それではその「混乱した」内容というのは、どのようなものであろうか。

今日テキストとして用いられているアカデミー版の30巻本の第6巻は、1858年にロンドンで出版されたロシア語の第二版を底本とするものであるが、この中にはつぎの八編が収録されている。

- I 嵐の前 (甲板での会話)
- II 嵐のあと
- III 単一にして不可分なる共和国の第57年
- IV Vixerunt!
- V Consolatio

8) I. Berlin, "Herzen and Bakunin on Individual Liberty", in *Continuity and Change in Russian and Soviet Thought*, Harv. Univ. Press, 1955, pp. 475-477.

9) I. Berlin, "Introduction" to A. Herzen, *From the Other Shore*, translated by M. Budberg, London, 1956, p. xiv.

10) I. Berlin, "Herzen and Bakunin on Individual Liberty", p. 478.

11) I. Berlin, "Herzen, l'humanisme et la terreur", *Preuves*, No. 85, 1958, p. 18.

12) Malia, *op. cit.*, 376.

VI 1849年へのエピローグ

VII Omnia mea mecum porto

VIII ヴァルデガマス侯ドノゾ・コルテスとローマ皇帝ユリアヌス

しかし、『向う岸から』が最初1850年にハンブルグからドイツ語訳で出版された時には、二部に分かれ、第一部には対話形式の三編『嵐の前』『Vixerunt!』『Consolatio』が入っており、これには《Wer hat Recht?》(誰が正しいのか?)という題がつけてあった。(この題名は当然それ以前にゲルツェンが書いた小説『誰の罪か?』を思い起こさせるものである。)第二部には「六月事件」の回想の形をとる『嵐のあと』と『単一にして不可分なる共和国の第57年』の二編が『1848年6月23・24・25・26日』という題のもとにまとめられ、最後にゲオルク・ヘルヴェークへあてた『La Russie』と題する論文と『マツティーニにあてたロシア人の手紙』とが入っていた。ゲルツェンはその後五年して1855年に最初のロシア語版をロンドンで出版したが、この時には『1849年へのエピローグ』と『Omnia mea mecum porto』、それに『ヴァルデガマス侯ドノゾ・コルテスとローマ皇帝ユリアヌス』の三編を新たに加え、その際前にあったヘルヴェークとマツティーニにあてた書簡形式の二論文は削除した¹³⁾。今日用いられているテキストの底本である1858年に出たロシア語の第二版は、ごくわずかな語句の修正を除けばこの1855年版とほとんどまったく同じである¹⁴⁾。

ところで対話形式をとる三編のうち『嵐の前』と『Vixerunt!』は、ゲルツェン自身とその友人И. П. ガラーホフ(1809~1849)との間に1847年の末に実際に行なわれた「ながい会話」と「論争」にもとづくものであるとゲルツェン自身後年回想している¹⁵⁾ところから、多くの研究者はこの二編に登場する二人の中、一方の「中年の男」をゲルツェンその人に、他方の「若者」をガラーホフにきめてしまって疑わないのである¹⁶⁾。しかるにガラーホフはゲルツェンよりも3歳年長であり、この「ながい会話」の行なわれた1847年には38歳で、ゲルツェンの方は35歳にすぎなかった。したがってこの「中年の男」と「若者」という二人の人物の設定は、作家ゲルツェンのフィクションと見なければならぬ。そしてこのことは二人の人物および会話の行なわれる場面の説明が極端に簡略化されているのに比し、会話自体は不自然と思われるほど長いことから言えるのであるが、それだけではない。ドストエフスキーが『作家の日記』の中に記しているつぎの「エピソード」がこの間の事情をより立ち入って説明してくれるように思われるのである。

「ある時、私は亡くなったヘルツェンと話をしてある時に、『彼岸より』という彼の著作を口を極めて褒めたことがある。この書物に就いては、ミハイル・ペトローギッチ・ボゴゼンも、外国でヘルツェンと会見した顛末を綴った興味ある優れた文章中で、賞讃の言葉を書き連ねてあるので、私はこの上なく愉快に感ずる次第である。この書物は二人の人物、即ちヘルツェンとその論敵の会話という形式で書かれてある。

13) VI, 486.

14) VI, 436-440.

15) IX, 120.

16) この点は勝田氏や松岡氏も同様である。

ゲルツェンの『向う岸から』について

『でも、特に私の気に入った点は、』私は話の間に感想を述べた。『その論敵も中々頭がいいといふことです。さうでせう。あの論敵もいろいろな場所で、あなたを土俵際まで押しつめてゐるぢやありませんか。』

『ええ、つまりそこが味噌なんです。』とヘルツェンは笑ひ出した。『一つあなたに逸話をお話ませう。一度、私がペテルブルグにゐた時、ベリンスキーが私を自分の家へ引っばって行って、むきになって書いた自分の論文を読んで聞かせました。『A氏とB氏との会話』という題でした。(これは彼の著作集に入っている。)この論文の中でA氏は、と、いって、勿論、当のベリンスキーのことですが、——非常に聡明な人間として書かれてゐるけれど、論敵のB氏の方は幾らか俗っぽくなってゐるのです。ベリンスキーは読み終わった時、まるで熱病やみのやうに性急な期待の表情で、私に訊ねたものです。『さあ、どうだね。君はなんと思ふ?』『さやう、いいことはいいけれど、君がたいへん惻口なのは分るにしても、あんな馬鹿を相手に貴重な時間を空費するなんて、いい物好きぢやないか。』ベリンスキーは長椅子に身を投げて顔をクッションに埋め、有りったけの声で笑ひながら、『やられた! やられた!』と怒鳴ったものです。』¹⁷⁾

以上の「逸話」は、ゲルツェンがこの作の構成の秘密を意識していたことを物語るものである。その秘密とは作者が自らの見解を二人の登場人物に語らせること、あるいは、二人の人物の論争の中に作者自身の疑問を提出し、相反する見解のジンテーゼの中にその解決を見出さんとする方法であって、このことは第IV編の『Consolatio』について、よりはっきりする。この中に出て来る二人の登場人物は、一人が二十五、六歳の婦人で、もう一人は中年の医者であるが、以下の本論で詳しく見るように、そのいずれもがある時はゲルツェンその人の見解を代弁しながら、いずれも作者とは異った考えの持ち主として描かれている。そして作者はこれら二人の蔭にかくれ、二人に論争させることによって自らの思想を読者につたえようとしている。このような構成上の秘密は第III編の『単一にして不可分なる共和国の第57年』についても言える。この一編は最初相手を設定し、(モスクワの友人たちと思われる)その相手にブルジョワ共和制や自由主義の本質についての作者の見解をつたえる形で始めながら、後半三分の二ぐらいのところに来ると突如対話の形をとって、別の相手が疑問を呈するようになる。しかもその相手の説明は全然ない。ここにおいてわれわれは作品『向う岸から』のもつ構成の秘密が何であるか気づくに至る。即ち対話形式の先に述べた三編はもとより、第II, III編も本質的には自問自答であって、このことを知っていたからこそゲルツェンは、体裁の上ではずっとすっきりしていた1850年のドイツ語版の形式を、わざわざロシア語版で変更したのだということである。そしてこのような自問自答がゲルツェンによって、自己の思想をつたえるもっともよい手段であると考えられていたこと、彼がめざしたのが二元論の克服であり、最後に到達したのが実存主義的な色彩の濃い「生の哲学」であったことをわれわれは以下において見るであろう。ところでロシア語版ではじめて『向う岸から』に加えられたVI, VII, VIII編の中、第VI編は内的独白と言ってよいものであり、第VIII編は最初から新聞に掲載すべく書かれた、他とはやや

17) 『ドストエーフスキー全集』、第13巻『作家の日記』(上)、米川正夫訳、昭和27年、河出書房、6頁。

性格を異にするものである。『向う岸から』全八編の中で、最後に書かれたのは第 VII 編の『Omnia mea mecum porto』であるが、これがとりもなおさず全体の結びとなっている。第 VIII 編がそれよりも前に書かれているにもかかわらず、他はすべて執筆順に配列されながら、これだけ末尾にもってこられたのは、全体の「附録」ないし「つけたり」のつもりでこうしたのであろう。

全八編の執筆の日附を、この作品を理解する上で不可欠と思われるゲルツェンの行動や政治的事件との関係においてクロノロジカルに並べると以下ようになる。

〔1847年〕

- 1月31日 ゲルツェン一家モスクワを出発してパリへ向う。
- 3月25日 パリに到着。
- 8月14日 パリよりル・アーヴルへ。約一ヶ月滞在し、ついでイタリアへ向う。
- 9月9日 ギゾー、首相となる。
- 10月14～11月22日 ゲルツェン、フランスに戻り、しばらくしてローマへ向け発つ。
- 12月31日 **I『嵐の前』**(ローマ)

〔1848年〕

- 1月1～12日 ローマ、ミラノ、リヴォルノ、トリノ、パードヴァ、パレルモに民衆デモ。
- 2月22日 パリで労働者、学生、小市民のデモ始まる。バリケード築かる。
- 2月23日 国王、ギゾーを罷免、モレー、首相に就任。
- 2月24日 ルイ・フィリップ退位。パリの民衆、議会に侵入。臨時政府成る。
- 2月25日 第二共和制宣言。
- 2月27日 三色旗を国旗に制定。
- 3月13～22日 ウィーン、ハンガリー、ロンバルディア、ベルリン、ヴェネチアにて民衆反乱。
- 4月16日 パリの労働者デモ。45サンチーム税増額。
- 4月23日 総選挙行なわれ、ブルジョワ共和派圧勝す。
- 5月4日 憲法制定議会成立。
- 5月5日 ゲルツェン一家パリに帰る。
- 5月15日 パリの労働者、政府がポーランドの独立運動に援助を拒否したことに抗議デモ。政府によって撃退さる。
- 6月23～27日 「六月事件」。カヴェニャック、行政長官に任命され独裁権をにぎる。パリに戒厳令(→10月17日まで)。政府は暴動を徹底的に鎮圧。
- 6月28日 カヴェニャック、内閣を組織。六月事件審査委員会設置さる。
- 7月24日 **II『嵐のあと』**(パリ)
- 9月22日 第一共和制樹立第57周年祝賀会。
- 10月1日 **III『単一にして不可分なる共和国の第57年』**(パリ)
- 10月17日 戒厳令解除。
- 11月12日 第二共和国の新憲法発布さる。ゲルツェン、コンコルド広場における

ゲルツェンの『向う岸から』について

- 憲法発布祝賀パレードを見る。
- 12月1日 **IV『Vixerunt!』**(パリ)
- 12月10日 ルイ・ナポレオン，共和国大統領に当選。
〔1849年〕
- 3月1日 **V『Consolatio』**(パリ)
- 5月28日 立法議会開かる (→1851.12.2)。
- 6月13日 山岳派，パリに暴動を起すも当局により簡単に鎮圧さる。
- 6月22日 ゲルツェン，ジュネーヴへ避難。
- 7月3日 フランスの遠征軍，ローマへ侵入。
- 8月23日 ゲルツェンとプルドンとの間に『人民の声』紙に関し協力の契約なる。
- 12月中旬 ゲルツェン，チューリッヒへ移る。
- 12月21日 **VI『1849年へのエピローグ』**(チューリッヒ)
〔1850年〕
- 3月18日 **VIII『ヴァルデガマス侯ドノゾ・コルテスとローマ皇帝ユリアヌス』**
(パリ)
- 4月3日 **VII『Omnia mea mecum porto』**(パリ)
- 6月 ゲルツェン，パリからニースに移る。イタリアの民族運動の指導者らと知己になる。
- 9月 ゲルツェン，ロシア政府の帰国要請を拒否し亡命の決意を固める。
〔1851年〕
- 11月15日 ゲルツェン，海難により母と一児(コーリヤ)を失う。
- 12月2～4日 ルイ・ナポレオンのクーデター。

*
**

I 『嵐の前』(甲板での会話)

『向う岸から』全八編の最初に来る本編は全体の導入部をなすものであって、以下の七編において論ぜられる問題の基本点のほとんどが、すでにここに出されていると言ってよい。

本書の執筆の日付は1847年12月31日であるが、ゲルツェンはこれより1カ月ほど前の11月20日に、ニースから父の遺言執行人でもあり、外国に出てからは自分の金銭上の代理人でもあったクリュチャーレフにあて、「ドミトリー・パーヴロヴィッチ¹⁸⁾に、わたしがここで『船の上』という題の小さなファルスを書いたとつたえて下さい¹⁹⁾」と書いている。これが『嵐の前』についてのおそらく最初の記述であろう。年が明けて翌1848年1月30日には、グラノフスキーらモスクワの友人たちにあてた手紙の中で、今度は「現代

18) ゲルツェンの従兄弟たるゴロフヴァストフのこと。

19) XXIII, 45.

の特徴についてさらにちよとした会話を書いたが、送ろうか、送るまいか、まだ考慮中だ」²⁰⁾と言っている。前の手紙の шутка が今度は небольшой разговор о современности に変っているが、出版についてはまだはっきり決心がつかないでいたのがわかる。それが8月2日付の手紙では友人たるコルツに対し、『嵐の前』を送るから検閲を通るかどうか目を通してもらいたいと頼み、さらに「小論『嵐の前』の出版は何ら障害ないと思う——これは私にとってとても大切なものだ。オガリ (ヨフ) とグラノ (フスキー) にも読んでもらいたいのだが。」²¹⁾とはっきり題名をあげて、出版の希望を明かにしている。しかし二月革命以来、極度にきびしくなったロシアの検閲事情はこの作品の出版を許さず、やむなくゲルツェンはこれを他の作品と共に、若い友人たるドイツの急進的ジャーナリストのフリードリヒ・カップ (1824~1884) に自ら口述し、1849年秋チューリッヒで印刷し、翌年ハンプブルグから匿名で発行した²²⁾。これが最初のドイツ語版であることは、すでに述べた。

この『嵐の前』は、『甲板での会話』という副題が示すように、二人の人物が船のデッキの上で会話を交すところから始っている。しかしわれわれは、それがどのようなシチュエーションにおいて、いかなる人物の間で行なわれるか、まったく予備知識を持つことなしに、抽象的な話の内容に冒頭からひき入れられる。そして全体のように三分の一ぐらい来たところで、「……若者は賛成しかねるといふうに頭をふって、ちょっとのあいだ海を見つめた。——完全な嵐がつづいていた。頭の上では重く重い黒雲がゆっくりと動いていた。雲はきわめて低く、船から吐き出される煙がひろがって、それといっしょになった——海はくろぐろとしており、空気はよどんでいた」²³⁾という数行にはじめてぶつかる。これが会話の行なわれる状況をあらわす最初の個所であって、次に出してくるのは『嵐の前』の末尾の次の一文で、これですべてである。「もうずっと前から重い大粒の雨がわれわれの上に降り注いでいた。にぶい響きの雷鳴が、はっきりと聞こえるようになり、稲光りが強くなってきた。すると雨がどっと滝のように降り出した……一同は船室に駆けこんだ。船はきしみ、揺れかたは堪えがたいものになった——会話はそこで途絶してしまった。」²⁴⁾

しがって、『嵐の前』からだけでは、「若者」の相手がどんな人物なのか、まったくわからないことになっている。そもそも『向う岸から』の『向う岸』がいったい何をさすのか、その意味するところも二、三にとどまらないといった問題があるが、この「船の上」という状況の設定自体も、ノアの方舟や大洪水と結びついたゲルツェンの比喩的表現と考えられないこともない²⁵⁾。

いずれにせよ『嵐の前』の二人の登場人物がようやく明らかになるのは第IV編『Vixerunt!』になってからであり、この中の「この時、すでにわれわれに馴染みの一人の若者が人びとを押し分けて中年の男に近づき……」²⁶⁾とある個所から、われわれは相手が「中

20) XXIII, 58.

21) XXIII, 82.

22) VI, 9; X, 86; VI, 486.

23) VI, 25.

24) VI, 39.

25) Cf. F. B. Randall, "Herzen's From the Other Shore", *Slavic Review*, March, 1968, p. 92.

26) VI, 64.

年の男」であることをはじめて知るのである。ところでこの「中年の男」は、「若者」を「夢想家にして観念論者」²⁷⁾と呼び、また「ローマン主義に忠実な²⁸⁾」者とも言っている。そして自分自身は「外科医に似ている」²⁹⁾と表現しているが、あくまでも現実を直視し、人間の行動や歴史を自然を見るのと同じように冷静に観察せんとするリアリストである³⁰⁾。すでにわれわれはこの二人のうち「中年の男」をゲルツェンに、「若者」を友人ガラーホフになぞらえることの危険を先に見た。「若者」はゲルツェンのうちなるロマンティズムを、「中年の男」はリアリズムを代弁するものであり、対話はこの二人の論争に名をかりてそのジンテーゼをめざすものと考えらるべきであろう³¹⁾。

論争はまず「中年の男」の冷静さに対する「若者」の不満と苛立ちから始まる。彼の苛立ちは社会が自分たちの理想とする方向に進んでゆかないこと、とくに一般大衆が、学問も教育もあり、すぐれた理想をかかげて世を導かんとする指導者の言うことを聞こうとしない現実からも来ている。ロマンティストで理想主義者である彼は、現代の政治的・社会的状況を閉塞した、息苦しいものに感じ、なんとかしてこの状況を打開したいと思っている。彼にはじっと腕をこまねいて、第三者として超然と世の動きを見ていることが耐えられないのである。世の中には現存の社会秩序に満足して、のうのうと暮している人がいる一方で、「飢え」、「必要に迫られて、絶望的な戦をしている」人たちがいる。この現実を前にして、未来のよりよき社会の建設を信じて「新しい世界の道標を打ちこもうとする」³²⁾ことこそ、自分たち知識人の仕事にほかならないと彼は主張するのである。

このような理想主義的「若者」の見解に対して、リアリストたる「中年の男」は「しかし、新しい世界がわれわれの計画通りに建てられると考える根拠はどこにもないのだ」³³⁾とつめたく言い切る。彼に言わせれば「未来は存在しない。それは、あるいは必然的な、あるいは偶然的な幾千もの条件と、思いがけないドラマチックな結末や *coups de théâtre* をもたらす人間と意志との総計の所産である。歴史は即興的なもので、くりかえしはめったにない。あらゆる偶然を利用し、一度に何千という扉を叩く……どれが開くかは誰にもわからない」³⁴⁾からである。しかし若者にしてみれば「もし未来がわれわれのものでないとしたら、われわれの全文明は虚偽であり、二十五歳になって思い出して鼻で笑うことになる十五の乙女の愛でしかなくなる」³⁵⁾し、いままでの人類の努力がすべてむなしいものになり、人間の歴史はシェークスピアのいう「愚か者の語った退屈な話」³⁶⁾になってしまう。彼には「歴史を一つの全体に結びついている一本の赤い糸」³⁷⁾を、「中年の男」が認めない

27) VI, 64.

28) VI, 68.

29) VI, 26.

30) VI, 20-21.

31) イワノフ＝ラズムニクは、つとにゲルツェンの中にロマンティズムとリアリズムが単に混在しているのではなく、いかに有機的にジンテーゼされていったかを指摘している。Иванов-Разумник, Указ. соч., стр. 392, 402.

32) VI, 25.

33) Там же.

34) VI, 31-32.

35) VI, 26.

36) VI, 30.

37) VI, 33.

のが苛立たしいのである。この一本の「赤い糸」とは、とりもなおさず人類の歴史の「目的」であり、何万年という人間のいとなみに意味を与えるものである。そして、人間の歴史はこの「目的」に向っての不断の「進歩」であるとロマンティストは考える。しかし、リアリストがもっとも批判したいのは、このような歴史における目的としての「進歩」の理念であった。彼は言う。「もし進歩が目的なら、われわれはいったい誰のために働いているのか？……人は用心しなければいけない。無限の遠くにある目的は目的ではないのだ。それはいわばトリックなのだ。」³⁸⁾「もし人類が何らかの結果をめざしてまっすぐに進んでゆくなら、そこにあるのは論理であって歴史ではないだろう。」³⁹⁾もし歴史に「libretto (脚本)」があるとしたら、歴史はすべて興味を失い、不必要で、退屈で、こっけいなものになってしまうことだろう⁴⁰⁾と。

このようなリアリストの歴史哲学は、その後もたびたびくりかえし語られるが、このことは彼が『Vixerunt!』の中でより明瞭に述べているように「歴史と自然とは同じ小説の二つの章であり、端は大いに隔っていても中心ではきわめて近い同一のプロセスの二つの局面⁴¹⁾と考えることに由来している。「同じ小説」とは何か？ いうまでもなく、「生」そのものである。そして『嵐の前』においてもリアリストは「生が純粹理性の弁証法とは一致しない、それ自体の胚形成をもっている」と言ったあとで、つぎのように「生の目的」を説明する。「植物にとってあの輝やかしく絢爛たる花冠は何のためにあるのか？ あの消え去ってしまうかぐわしいかおりは何のためにあるのか？」といえ、それは「何のためでもない。」⁴²⁾「生は個人的なもの、個別的なものの保存にはまったく関心がない—それはいつでもそのすべてを現在に注ぎ込む⁴³⁾ものだ。それでは「生の目的」とはいったい何なのか？ 「それは予定表なのか、それとも命令なのか？ いったい誰がそれを作り、誰に対して布告されたのか？ そして、それは義務なのか、そうではないのか？ もしそうなら、われわれは木偶なのか、それとも人間なのか？ 実際に精神的に自由な存在なのか？ あるいは機械の中の歯車なのか？」。このようにリアリストは自分で自分に問いかけて、つぎのように結論する。「生とは、したがって歴史とは、到達の手段というよりは、到達された目的と考えたいのだ。」⁴⁴⁾このような「中年の男」の思想は、第V編の『Consolatio』の中でもくりかえされるところの『向う岸から』の主題の一つである。「いったい何のために人は生きるのでしょうか？」というイデアリストの婦人の問いに対し、リアリストたる医師はつぎのように答える。「よくも悪くも生まれたから生きているのです。どうしてすべてのものが生きているのか、わたしにはこの疑問は疑問の範囲を越えているように思われます。生は目的であると同時に手段であり、原因であるとともに結果なのです。それは再び平衡を失うだけなのに平衡を求めてやまない、活潑で緊張した物質の永遠の動揺であり、この休みなき運動は *ultima ratio* であって、これより先に進むことは

38) VI, 34.

39) VI, 36.

40) Там же.

41) VI, 66-67.

42) VI, 29, 31.

43) VI, 32.

44) VI, 33.

人間にはできないことです……生は目的を達することはありませんが、あらゆる可能なものを実現し、実現したものはすべて継続してゆきます。それはもしできることなら、より完全に、より以上に生きるためにいつでも前進しようとしています。そのほかに目的はないのです。」⁴⁵⁾

ゼンコフスキーは、このような考え方は明らかに唯物論ではなく、シェリング的な vitalistic な自然観であり、さらには、ベルグソンの「創造的進化」の思想に近いとも述べているが⁴⁶⁾、このような「生」についてのゲルツェンの思索のあとには、すでに『嵐の前』よりも五年前に書いた日記の一節に読みとることができる。1842年6月28日の日記に彼はつぎのように書いている。「もし生をふかく凝視するならば、外的事情がいかなるものであれ、最高の善 (благо) は存在そのものである。このことを理解するならば、未来のために現在を軽視することほど愚かなことはないということがわかるであろう。現在が存在の真の場なのである……生の目的は生である。」⁴⁷⁾むしろこのような考え方は、『嵐の前』における「一人の人間の死は、全人類の死に劣らず不条理なものだ」⁴⁸⁾ というリアリストの言葉とともに、後によりはっきりした形をとるようになるゲルツェンの実存主義的思考の萌芽をあらわしているのではないだろうか。いずれにせよ、歴史の中に「未来の進歩」といったあらかじめ定めたプログラムの存在することを否定し、「歴史においては、すべてが即興であり、すべてが意志であり、すべてが *ex tempore* (準備なし) なのだ」⁴⁹⁾ と主張するリアリストの考えは、歴史における必然性のカテゴリーと可能性のカテゴリーの両方の存在を認めるものであって、さらにこれが「行為」せんとするロマンティストの主体的な「自由意志」を認めんとする時に、いかなる形をとるかをわれわれは第 VII 編において見るであろう。さらにこの可能性のカテゴリーの主張を、後にこれをロシア史の発展にあてはめるとき「わたしはロシアが必ずしもヨーロッパ的發展のすべての局面をたどらなければならないとは考えない。またわたしには、未来の文明というものが過去の文明と同じ存在条件に服さなければならぬものとは思われない。」⁵⁰⁾ という言葉になる。この言葉は『向う岸から』の最初のドイツ語版には含まれていた《La Russie》と題する1849年初頭に書かれた文の一節である。そしてゲルツェンはこのヘルヴェークにあてた書簡形式の論文の中で、後にくりかえしくりかえし主張したその「ロシア的社会主義」の理論を、はじめて述べたのである。そしてわれわれはこの「ロシア的社会主義」の理論が、ロシアの未来に対する期待の中に生まれたものであることをすでに知っている⁵¹⁾。ゲルツェンもまたリアリストと同じように、明日にでも「エンケ慧星が地球にぶつかるかも知れないし、地質上の大変動が起って、すべてをさかさまにしてしまうかも知れない」⁵²⁾ と考えていたのであ

45) VI, 93.

46) V. V. Zenkovsky, *A History of Russian Philosophy*, translated by G. L. Kline, volume I, London, 1953, p. 287.

47) II, 217.

48) VI, 37.

49) VI, 36.

50) VI, 168.

51) 拙稿 “Sur la Formation de la Théorie du «Socialisme Russe» chez Herzen”, 『スラヴ研究』 No. 4, pp. 87-103.

52) VI, 37.

る。したがって、未来は存在するかもしれないし、存在しないかもしれない。それならば存在する方に賭けよう、というのが彼の立場であって、このことをわれわれははじめに確認しなければならない。

結論をすこし急ぎすぎたかも知れないが、われわれはすでに『嵐の前』において、『向う岸から』の主たるテーマがすでに以上のような形で出されていることをみて、つぎへ進むことにしよう。

II 『嵐のあと』

『嵐の前』から七カ月たって書かれたこの編は、その前半が「六月事件」に対するゲルツェンの「慟哭」⁵³⁾ともいうべきものであり、後半が真の革命とはいったい何であるかという問題をめぐっての自問自答になっている。

二月革命に際してゲルツェンがその思想と行動において具体的にいかなる反応を示したか、ということは、それ自体ひとつの興味ある研究テーマであり⁵⁴⁾、またそれをモスクワ時代の友人たるバクーニンなどと比較することも興味あるところであるが、いまはふかく触れない。ただ彼がバクーニンらと違って、この革命に身を投ずることなく、終始「観察者」の態度をとりつづけたという事実は、『向う岸から』を理解する上でも銘記しておかなければならないところである。ゲルツェンが二月革命のニュースをローマで聞いたのは3月4日の未明、カーニバルの仮装舞踊会においてであった。「*Viva la Repubblica francese! Viva la Francia libera!*」という群衆の叫びを「これは夢の中であろうか、現実であろうか?」⁵⁵⁾とて彼は聞いた。しかしすぐにパリへ馳せ帰る様子は示さず、翌3月5日の友人アンネンコフにあてた手紙の調子は、きわめて冷静である。「革命は日々ヨーロッパの様相とわたしの旅程を変える。いまわたしは四月にもう一度ナポリに行き、そこからパレルモへ、ついで暑くなったらマルセーユに行くつもりだ。」⁵⁶⁾という私信の文面からは、「どれほどの感激でわたしは再びパリに飛んで来たことか」⁵⁷⁾という三カ月後の半ば公の書簡に書かれた「有頂天な」気持は見出せない⁵⁸⁾。むしろクリュチャーレフにあてた私信の中で書いている「金銭上の問題」で「予定をかえて」パリに戻った⁵⁹⁾、という方がより真実に近いと思われる。事実、彼がパリに戻ったのは、二月革命の知らせを聞いてから、まる二カ月もたった5月5日のことであった。すでにローマにいた時に臨時政府の閣僚名簿を読んだゲルツェンはこの革命の前途を危惧して「恐怖にとらわれ」⁶⁰⁾ていた

53) VI, 40.

54) このテーマについては Allen McConnell が 1954 年にコロンビア大学に博士論文を提出している。筆者は最近これを読む機会を持ちえた。Against All Idols: Alexander Herzen and the Revolution of 1848. A Chapter in the History of Tragic Liberalism, University Microfilms, Ann Arbor, Michigan, 1967.

55) V, 123.

56) XXIII, 65.

57) V, 133. (『フランスとイタリアからの手紙』, 第9書簡)。

58) この点勝田氏も従来言われてきたように、「熱狂的な興奮にかられて」「躊躇なく、イタリアにとどまるよりはパリに戻る」ことをえらんだとしている。『近代ロシア政治思想史』394頁。

59) XXIII, 76.

60) V, 133

し、さらに革命の波がもっとも高まっていた四月中旬にも、「これらすべてからどういうことが生ずるのだろうか？ これらはみななが続きするものなのだろうか？ 空には黒雲がないというわけではなく、ときどき墓穴からはつめたい風が死体の匂いや、過去の匂いを運んで来る。」⁶¹⁾と不吉な予感を書き記している。このような彼の危惧は、さらにイタリアからフランスに戻る途中マルセーユで聞いた「ルーアンの蜂起の恐るべき鎮圧」⁶²⁾の知らせによって、いっそう強められるところとなった。さらにパリに着いてはやくも10日後には政府と労働者の決裂を告げる「5月15日事件」を目撃する破目になる。この日政府がポーランドの独立運動に対する援助を拒否したことに抗議してデモを行なった労働者は、議会に侵入し、「自分たちの議員によって欺かれた人民の名において」議会の解散を宣言したが、政府側が急遽召集した国民軍によって鎮圧され、首謀者は逮捕されて終わった。この事件についてゲルツェンは1カ月たらず後につきのように書いている。

「5月15日はわたしの目から覆いを取り除いた。疑いの余地すら残らなかった——革命は敗れたのだ。このつぎは共和国が敗れるであろう……議会在勝ったのだ。君主制の原理が勝ったのだ。晩の九時ごろわたしは家に帰った。心は重かった。」⁶³⁾六月事件のわずか十数日前に書かれたこの手紙には、すでに革命に対する期待はまったく見られない。ゲルツェンの危惧はここにおいて現実のものとなったが、さらにそれに決定的なとどめを刺したのが「六月事件」であった。その後も深刻化する経済的危機と失業問題の中で労働者は6月21日の夜抗議デモを決議し、23日にはついにバリケードを築いて反政府暴動に立ちあがった。しかし、議会から反乱鎮圧の全権を委ねられていたカヴェニャックによって、彼らは23日から26日にかけてのすさまじい市街戦の後に、ついに鎮圧されることになる。この反乱によって即時銃殺された者は1,500人を数え、逮捕された25,000人の中、多くが死刑にされたり流刑になったと言われている⁶⁴⁾。

『嵐のあと』はこの「六月事件」の直後の「耳にはまだ銃声が鳴りひびいている」状態で書かれた、なまなましいルポルタージュともいえよう。

「……6月26日の夕方に、わたしはすこしの間隔をおいた規則正しい一斉射撃の音を聞いた。わたしたちは皆たがいに顔と顔とを見合わせた。だれの顔も青ざめていた……『銃殺をしているのだ』——みんな一度に言って、たがいに顔をそむけた。わたしは窓ガラスに額を押しつけていた。このような瞬間に対して人は、十年にもわたる憎悪をいただき、生涯をかけての復讐を誓う。かかる瞬間を許すものこそわざわいあれ！」⁶⁵⁾

ゲルツェンは革命に加わらなかった。彼の立場は観察者のそれであった。これはたしかである。しかしさらにつきのような一文を読むとき、人は彼が決して「単なる」観察者ではなかったこと、『嵐の前』であの「若者」が非難した「中年の男」のように、「超然たる」観察者ではなかったことを知るのである。

「……耳にはいまでも銃声や駆けゆく騎兵隊の馬の蹄の音や、死んだような通りをゆ

61) V, 131.

62) V, 133.

63) V, 132-133.

64) 井上幸治編『フランス史』(新版) 山川出版社, 昭和43年, 386-387頁.

65) VI, 43 (強調—原文).

く砲架のおもくるしい音が鳴りひびいている。記憶の中に個々のこまかい情景が浮かびあがりまた消えてゆく——担架の上では負傷者が片手で脇腹をおさえている。血がその腕の上を流れる。死体をつめこんだ乗合馬車、両手をしばられた捕虜たち……。

なにもしないで自分の家の部屋の中において、門の外に出ることもできずに、遠く近く、あたりに銃声、砲声、叫び声、太鼓の音を聞き、すぐそばで血が流され、人びとが斬り合い、突き合っていることを、そしてすぐそばで人びとが死につつあることを知っていて、しかも自分は手をこまねいていること——このことから人はみずから死ぬか、あるいは発狂するかも知れない。わたしは死ななかつた。しかし急に老いこんでしまった。六月事件のあと、わたしはあたかも重病のあとのようにすこしずつ回復しつつある。」⁶⁶⁾

まこと、「このような激動のあとでは、なま身の人間はもとのままではありえない。」⁶⁷⁾そしてその場合に、考えられる道は二つある。一つは「より宗教的になって、自分の信仰に絶望的なかたくなさで執着し、絶望そのものの中に慰めを見出して、雷に焼かれ、胸に死を抱きつつふたたび緑の芽を出す」か、あるいは「男らしく我慢して、最後の望みもあきらめ、酔もさめた心地で、肌をさす秋風が運んで来た最後のわくら葉をも手離す」かである。「一方は理性を喪失した幸福へと通じ、もう一方は知恵の不幸へと通じている。」⁶⁸⁾しかしてゲルツェンその人は、はっきりつぎのように断言する。「わたしは知ることをえらぶ。それによってわたしから最後の慰めが奪われてもやむをえない。わたしは精神的乞食として世をわたる——しかし、子供じみた希望や若者の熱狂は金輪際もつまい！ すべてこれらは毅然たる理性の審判に委ねよう！」⁶⁹⁾と。

ここにおいてゲルツェンは、「革命とは何か？」「どうしてそれは挫折したのか？」という問題を俎上にのせる。彼の見るところでは今までの革命はいずれもが理性の名によって始められながら、人の心の中なる「保守主義」のために、どれもが途中で挫折してしまつたと考えられる。この保守主義は「われわれが育ち、慣れ親しみ、慈められ、慰められてきた思想と別れることがむずかしいことであり、それを犠牲にすることは忘恩とすら見られる」⁷⁰⁾ことからきている。これは右翼の反動についてだけでなく、革命家と称せられる人びとにおいても、まったく同じである。彼らは「教会と国家、家族と道徳、善と悪とを論理の法廷に召喚したあとで、過去の断片を救おうとつとめる」⁷¹⁾やからである。ゲルツェンはなによりも、このような革命家の考えの中にひそむ「保守主義」をすどくあばく。彼らは、「あたかも君主制をなくすには、ルイ 16 世を殺せば十分だというように、宗教をなくすには無神論で十分」⁷²⁾だと単純に考えこんでいるが、彼らの「共和国」にたいする考えの中には、その敵の君主制支持者と基本的にはまったく同じ思考様式があるのに気づいていない。即ち、ゲルツェンに言わせれば、これら革命家も亦、「共和国」をあた

66) VI, 41-42.

67) VI, 44.

68) Там же.

69) Там же.

70) VI, 45.

71) Там же.

72) Там же.

ゲルツェンの『向う岸から』について

かも神聖にして侵すべからざるものと考え、salus populi を絶対視しているからである⁷³⁾。これら自由とか平等とか友愛とか、さらには人類とか、共和国とか公共の福祉とかいった抽象的な旗印のもとに、なま身の人間に犠牲を強いる革命家の思想をゲルツェンは後にも指弾するが、ここではつぎのように言っている。

「すべての宗教的なもの、政治的なものが人間的で、単純で、批判と否定とを許すものにならない限り、世界に自由は来ないであろう。成人した論理は、聖列に加えられた真理をきらうものだ。それはこれらの真理を天使の位から人間の列におろし、神聖な神秘を明瞭な真理に変えるのである。それはなにひとつとして神聖不可侵とは考えず、もし共和制が君主制と同じ権利を自己に付与するならば、共和制をも君主制と同様に、いや、それ以上に軽蔑するものである……君主制はそれ自体ひとつの宗教であるが、共和制には神秘的な口実も、神授された王権もない。それはわれわれと同じ基盤に立っている。王冠を憎悪するだけでは足りないのであって、フリジア帽⁷⁴⁾を尊敬することをやめなければならぬ。不敬罪を罪として認めないだけでは不十分であって、salus populi をも罪と認めねばならない。共和制、立法、代議制、市民の概念とその他の市民および国家に対する諸関係についてのあらゆる考え方といったものを、今や人間が裁きにかける時が来ているのだ。」⁷⁵⁾

われわれはここにモラリストの目を感じる。ゲルツェンによれば、革命が敗れたのは、力関係とか、戦略・戦術といったものによるのではなかった。反体制の側にも体制側と同じ発想法が、過去をすてるにしのびぬ保守主義があったからである。しからば、真の革命とは何かというならば、それはいままでわれわれが政治や社会についてもっていた「あらゆる考え方」を根底からくつがえした上に成就するものでなければならない。したがってわれわれの当面の仕事は、「事実において勝ち誇っている過去」に対し、「それを思考において、確信において、人間の思想の名において殺す」⁷⁶⁾ ことであり、「新しい人間を圧迫し、その生きることを妨げ、未来の到来を妨害しているこの世界を滅ぼす」⁷⁷⁾ ことでなければならないと彼は主張する。かくて「Vive la mort! しかして未来が確立されるように！」⁷⁸⁾ という語で終る『嵐のあと』は、その思想においてアナキズムにもっとも近いものだといえる。「未来が確立」するためには、過去の重荷に呻吟している現在を徹底的に業火で焼きつくすほかはない。破壊が大きければ大きいほど、生まれいずる未来はより新しいものになるであろうという彼の考え方の中に、われわれは黙示録的と呼んで然るべき発想法を見出すことができよう。六月事件の「慟哭」で始る第II編は、かくてアナキスティックな破壊への呼びかけて終わっている。

73) VI, 47.

74) フランス革命のとき採用されて以来、自由のしるしとなった赤いふちなし帽。

75) VI, 46.

76) Там же.

77) VI, 48.

78) Там же.

III 単一にして不可分なる共和国の第 57 年

この一編は『嵐のあと』から二カ月余たった 1848 年の 10 月 1 日に執筆されたが、それより数日前にゲルツェンは戒厳令下に催された第一共和制樹立第 57 周年の祝賀会に出席した。このときの印象をもって始まる本編は、共和主義や自由主義の本質とその限界に対するゲルツェンのふかい洞察と、さらに前編の末尾に述べられた、新生のための破壊、革命のあり方をめぐる自問自答とを含むものである。

さて、この祝賀会に列席したゲルツェンは「ラ・マルセイエーズ」を合唱し、「Vive la République!」を叫ぶ、これら共和主義者の姿を見ているうちに「ある堪えがたい憂鬱が自分の中に湧き起る」⁷⁹⁾のを感じないではいられなかった。それは近い将来、銃殺されたり、バリケードの上で斃れたりする運命が彼らを待ちうけているかもしれない、という考えから来るのではなく、ゲルツェンにとって「彼らが実現不可能なことをまじめに信じており、彼らの誤解が真摯なもので、その熱烈な希望があたかもドン・キホーテの騎士精神のように、じつに純粹で非現実的」⁸⁰⁾に見えたからにはほかならない。これら革命のドン・キホーテたちは、「その革命精神にもかかわらず」「古い世界にしがみつきの」「この老衰した世界がユリシーズのように若返るものと考え、自分たちの共和国のほんの一片が実現しただけでも、古い世界は滅んでしまうということに気がつかない。彼らは自分たちの理想と現実の秩序との間の矛盾ほど大きいものはないということ、一方が生きるためには他方は死ななければならないということがわかっていないのである。彼らは古い形から抜け出ることができずに、それを何か永遠の境界と考えている。したがって彼らの理想は、ただ名前と未来の色どりを持ってはいるものの、本質的には過去の世界に属するものであり、そして彼らはそれを棄て去ることができないでいる。」⁸¹⁾

このような共和主義にくらべるならば、メッテルニヒやギゾーといった本来の保守主義者の方がより一貫している、とゲルツェンはいう。彼らが「自分たちの周囲の社会秩序の不正を知らなかった」と思ったら、それは大きな間違いであって、彼らはこれらの不正が近代社会の「全有機体の中にきわめてふかく組みこまれているので、それに触れたら建物全体が崩壊してしまう」ということをよく知っていたのである。そして「このことを理解していたからこそ、彼らは status quo の番人になったのである」⁸²⁾。

他方、自由主義者、共和主義者が首尾一貫していないということは、彼らが革命の最中にとった態度にはっきりとあらわれている。彼らは「王制復古以来、平等だとか、不幸なもの涙だとか、抑圧された者の苦悩や無産者の名において、人民に対して君主制的—封建制度の打倒を呼びかけてきた。」⁸³⁾「そして封建的支柱がひとつ、またひとつと倒れるのを見てあまりにも有頂天」になり、「自分たちの希望から逸脱してしまったのだ。」⁸⁴⁾ 彼らは「自分たちが偏見と思っているものだけでなく、永遠とも真理とも思っているすべての

79) VI, 50.

80) Там же.

81) VI, 50-51 (強調—原文).

82) VI, 55.

83) VI, 53.

84) Там же.

ものが崩れ落ちるのを見て」「青くなった。」⁸⁵⁾そして「半分崩れ落ちた壁のむこうから、書物や議会の無駄話や慈善的饒舌の中に出てくるのではない本当のプロレタリアート——黒い腕に斧を持ち、飢え、わずかにぼろをまとっただけの労働者が立ち現われたとき、われに返った。」⁸⁶⁾しかして六月事件のプロセスは、これら自由主義者、共和主義者が「労働者の傍若無人ぶりと忘恩に驚き、突如襲撃してパリの町を占拠し、その通りを屍で覆い、しかして文明と秩序を救うために、戒厳令の銃剣の蔭に自分たちの兄弟から身を隠した」⁸⁷⁾過程にほかならない。

彼らは「現状を変更することなしに」自由・平等・友愛といった自分たちの「*pia desideria* (敬虔な欲求)」の実現をのぞんだのだったが、近代ヨーロッパの国家形態は「その内的原理において自由とも平等とも友愛とも両立せぬものである」⁸⁸⁾ことを知らなかったと批判される。ところでゲルツェンがこのように考える根底には、社会というものを「オルガニズム」として理解する哲学があった。したがってゲルツェンによれば、社会形態というものも、「すべての生物と同じように、ある段階までは変りうる」が、また「すべての生物と同様、ある段階までしか変りえないもの」⁸⁹⁾だと考えられる。しかしてヨーロッパ社会の生活形態は、「キリスト教的、貴族主義的ヨーロッパの生活」によって作られたものであって、この限界をこえて進むことは、不可能だと彼は考える。たしかにヨーロッパのあるところでは、人びとは他のところよりも少しく自由であり、平等でありうるかも知れないが、「この市民社会の形態、この文明が存在する限り、どこにおいても本当に自由で、平等であることはできない」⁹⁰⁾と彼は主張するのである。そしてこの社会形態・文明というのは、結局のところゲルツェン自身をも含めた「少数者」のためのものであって、「それは多数の労働者があってはじめて可能なものである。」⁹¹⁾文明が発達し、維持されるために必要な余暇を見出すためには、つねに「誰かの労働が必要」なことは言うまでもない。「思想家が瞑想にふけり、詩人が夢想し、エピキュリヤンがたのしむことができるのもこの余暇のおかげ」⁹²⁾なのだ。そして、「もし過去において少数の者が本当に幸福で気楽に感じ、多数の者が黙っていたのだったら、この生活形態も正当化されたかもしれない」⁹³⁾が、「もはや労働者は他人のために働くことを欲していない」し、「今や誰ひとりとしてこの関係が正しいとは思っていない」⁹⁴⁾のだ、と彼はモラルの面から近代社会を批判する。このようなゲルツェンの姿勢は、政治制度、経済制度としての資本主義の自己矛盾の指摘というよりは、そこにおける人間関係が倫理的にみて許しがたいと考えるところからきている。そして、このような姿勢が、彼が「創始した」ナロードニキ主義の資本主義批判につ

85) VI, 52.

86) VI, 53.

87) Там же (強調—原文).

88) VI, 54.

89) Там же (強調—原文).

90) Там же.

91) VI, 56.

92) VI, 55 (強調—原文).

93) VI, 56.

94) VI, 57.

ながることは言うまでもない。事実、以上のような過程をへて展開されてきたゲルツェンの見解は、この編の三分の二ほどの所に来て、突如文章の調子が変わるとともに、自己の態度を明らかにしつつ、読者にも態度を鮮明にするよう迫るものとなる。

「悔い改めよ、諸君、悔い改めるのだ！ 裁きの日が諸君の世界におとずれたのだ。諸君は戒厳令によっても、共和制によっても、死刑によっても、慈善によっても、土地の分割によっても、世界を救うことはできない。」⁹⁵⁾ いまや「戦い以外に出口はなく」「君主制か社会主義か、残るのは二つに一つでなければならない。」⁹⁶⁾ そして彼は一人ひとりに詰問する。「しからば諸君はどちらのチャンスが多いと考えるのか？」そして「わたし自身は社会主義に賭ける。」⁹⁷⁾ と断言する。

未だ社会主義が「空想」にとどまって、現実の力をほとんど持ちえなかった 19 世紀の中葉において、社会主義の勝利などということは「想像することもむずかしい」⁹⁸⁾ と多くの人が考えていたことをゲルツェンはよく知っていた。その上で彼は、「だがキリスト教がローマに勝利することも同じように想像しがたかったではないか」と反論する⁹⁹⁾。このように古代ローマとキリスト教の関係を、近代資本主義社会と社会主義との関係になぞらえることは、彼が未だ学窓にあった頃ドイツ・ローマン主義哲学を学び、ついで、ピエール・ルルーの影響下にキリスト教にひきつけられた 20 歳台のはじめにさかのぼることができるが¹⁰⁰⁾、さらにこれは彼の「ロシア的社会主義」の一つの支柱をなす考えでもあった。われわれは先にゲルツェンが社会を一つの「オルガニズム」と理解する考えを抱いていたことを見たが、このことから彼は「死」というものを「オルガニズムの構成部分が別の目的を持つようになること」¹⁰¹⁾ だと理解する。しかして人間社会においてこれはどういうことかといえ、ある社会の「内的原理」が失われ、別の異なるものになることを意味する。したがって古代ローマ社会が、キリスト教によってまったく新しい「内的原理」において生まれ変わったように、近代資本主義社会も社会主義という新しい「内的原理」によって一度「死んで」、生まれ変わる事が可能だというのである。そしてキリスト教が生命を保ちえたのは、亡びんとするローマの人びとの間ではなく、北の森の中にいたワルワールの間であったように、この社会主義も「若い」ロシアのナロードの間にこそ真の生命を持つことができるのではあるまいか、という考えが、すでに『嵐の前』に暗示されている¹⁰²⁾。しかし一つの社会から、「内的原理」において異なるところの他の社会へ移る場合には、民族大移動の時代が示したような大きな激動^{ロシア}が考えられる。そしてこのような大変動が不可避であるか否かについての対話が、突如この編の終りの方で始まる。だがこの対話の主についてははじめにも述べたように、まったく説明がない。いま仮にこれを A と B であ

95) VI, 58.

96) Там же.

97) Там же.

98) Там же.

99) Там же.

100) Malia, op. cit., p. 144; A. Koyré, *Etudes sur l'histoire de la pensée philosophique en Russie*, Paris, 1950, p. 184.

101) VI, 54.

102) VI, 32.

らわすと、Aはつぎのように言う。「しかし未来の生活は、進歩のかわりに野蛮な道によってもたらされ、損失によって購われねばならないものだろうか？ わたしにはわからない……多くの人はこのような考えに腹を立てているが、わたしはそれを慰めに思っている。わたしにはこのような損失は、それぞれの歴史的段階が完全な現実であり、自らの個性を有し、それぞれが到達すべき目的であって手段ではないという証拠のように思われる。したがって、各段階にはそれだけに属し、それとともに消滅する自らの善と幸福があるのだ。」¹⁰³⁾これに対して、Bはつぎのように主張する。「すべてはその通りだ。しかし多くの人にとって、急激な暴力革命はなにか反撥を感じさせる。変化が必要だと思っている人たちも、それが除々に行なわれればよいと考えていることだろう。……自然も意識の段階にまで達したからには、より調和のとれたおだやかな変形がその発展段階にふさわしいのだ。」¹⁰⁴⁾このような「漸進主義」に対し、Aはさらにつぎのように反論する。第一に自然が意識にまで到達したというが、それは少数の選ばれた人によってであって、これら少数の人にとって明らかな思想も、それが他の多くの人の思想になるためには、彼らの頭脳が同じ程度の高さまで発達しなければならぬ。第二に「現に飢えと貧困に耐えている労働者」が目の前にいるのに、どのようにして「自分たちの独占と権利にしがみついている資本家たち」の「手を開くように説得する」ことができるだろうか。最後に、この「徐々の革命」なるものが、フランス革命の時に行なわれた類の「財産の細分化」ということだったら、その結果は「飢死することはたしかになくなるだろうが、猫の額ほどの土地やお粗末な仕事部屋に閉じこめられて、ただ飢死しないというだけのこと」になり、さらには、プチブルという「ブルジョワジーの中でも、もっとも悪い」存在が生ずるようになるだけだ¹⁰⁵⁾。

以上のやりとりは、明らかにゲルツェンに究極的解答がなかったこと、なかったからこそ、ここにおいて二人の人物の口を借りて、自分の疑惑を述べ、そうすることによって、相反する二つの思想のジンテーゼをはかるといった、彼が本来もっていた思考様式を端的に示している。事実、これらの問題は、後々もゲルツェンが追求しつづけたところであって、ツルゲーネフや(『再び古いテーマについてのバリエーション』『はじめと終り』)バクーニン(『旧友への手紙』)といった同世代の人たちとの論争においても、さらに若い世代の革命家との意見の対立(『Very dangerous!!!』)の際にもくりかえしあらわれてくる、生涯にわたっての執拗な問題であった。

IV Vixerunt!

本編は再び『嵐の前』に出て来た「若者」と「中年の男」との対話の形をとっている。背景は前の会話が行なわれてから一年近くたったパリにおいてである。たまたま二人がコンソルド広場において催された第二共和制の憲法発布を祝うパレードを見物に来ていて、群集の中に互いの姿を見つけて声をかわすといったシチュエーションになっている。つい最近イタリアから帰って来た「若者」は、その地の情勢を聞かれても「言わないほうがよ

103) VI, 59.

104) Там же.

105) VI, 59-60.

いでしょう……ひどいものです」¹⁰⁶⁾と答えるばかりである。二月の「嵐」から七カ月たって、革命当初の夢はつぎつぎに破れ、「若者」にしてみれば「あらゆる美しい夢、心からの希望が満たされ、実現される可能性を見たあとで」¹⁰⁷⁾「人類がふたたび完全に一世代おくれてしまい、またしても運動が鎮圧され、中止されてしまったのが残念でたまらない」¹⁰⁸⁾のである。これに対しリアリストたる「中年の男」は、「若者」が依然として事態を観念的に見ていることを指摘し、われわれは自然を研究するように、人間の「社会生活や歴史の生理学を客観的な学問の対象として」¹⁰⁹⁾研究することから出発しなければならないと説く。われわれはこのようリアリストの見解をすでに『嵐の前』に見てきたが、さらにここで彼は、あたかも「医者」が「重病人」に対する時のように「心の中では泣きもし、同情もするが、病氣と戦うためには涙ではなく、理解が必要」¹¹⁰⁾なのだ、次編の『Consolatio』の主人公たる「医者」を予告する発言をしている。

しかし「若者」にしてみれば、「全文明、全世界が混乱と破壊の中に崩れ落ちようとする時に、群衆が一人のこらず何か狂気にかられて混乱に陥り、きりきり舞いし、互いに殺し合うのを腕をこまねいて見ているなどということは——とても人間の力の及ぶところではない」¹¹¹⁾と思われる。革命の挫折というにがい体験をへた今では、ロマンティストでイデアリストたる「若者」にも、リアリストの言わんとしているところは理解できるのだが、彼の傍観的態度が、心情において容易に納得できないのである。彼には「中年の男」の「これほどの公平さ」というものが、ひっきょう「流れ」の中に身を投ずることのない「第三者」の冷静さから来ているように思われる¹¹²⁾。リアリストとしても、もし彼が「バルベスやマツィーニのように」生涯を革命にかけていて、ついに「待ちのぞんでいた日の曙光を見る段になった」¹¹³⁾あとで、最後にその夢のついえさるのを味わう破目になったとしたら、それも反動側の武力とか「物質的なあらあらしい力」によるものではなしに、自らが指導している民衆によって裏切られた結果だとしたら、はたして「これほどの節度をもってふかく議論をする」¹¹⁴⁾ことができるものかどうか、疑問を呈さずにはいられないのである。「若者」はここで二つの問題を出している。一つは「革命家と民衆」、あるいはもっと広い意味で解釈すれば「リーダーと大衆」との関係の問題であり、他の一つは「知識人のなすべき仕事は何か？」という問題である。これはとりもなおさず、ゲルツェンその人の抱いていた疑問のあらわれであって、『Vixerunt!』後半と、つぎの『Consolatio』全編は、この問題をめぐっての対話となっている。

まず第一の問題について「中年の男」は、革命の指導者たちが抱く理想を民衆が理解せず、解放のために立ちあがらぬからといって「苛立つ」ことは、およそナンセンスだと

106) VI, 64.

107) Там же.

108) VI, 72.

109) VI, 67.

110) VI, 71.

111) VI, 66.

112) VI, 79.

113) Там же.

114) VI, 80.

考える¹¹⁵⁾。なぜなら両者の間には「何世紀ものへだたり」があり、民衆と「人類の解放者」とは、それぞれ「二つの異った文化に属している」¹¹⁶⁾ものだからである。彼は「人民とか大衆とかいうものは、自然現象であり、太洋の如きもの」であって「彼らの道は自然の道であり、彼らは自然のもっとも近い相続人であって、はっきりしない本能や意識しない情熱によって動かされている」¹¹⁷⁾ものだと言主張する。だからといって「民衆を非難することは愚かなこと」であり、「民衆は正しいものだ」¹¹⁸⁾と彼は言う。なぜなら民衆は「つねに自分たちの過去の生活の諸状況に従っているから」であり、彼らは「善についても悪についても責任はない」ものであって、「豊作とか不作とか、櫛の木とか麦の穂とかと同じような事実」¹¹⁹⁾だからである。ところでこのような民衆が何千年ものあいだ苦しめられ、圧迫されてきたことに対して「教養ある少数の者が、ついに良心の苛責を感じて」彼らにむくいようとしたが、「このような少数者のおそまきの後悔が自由主義と名づけられる」¹²⁰⁾ものだったと彼は説明する。しかし、民衆を「ア・プリオリに創作し、読んだものの思い出から民衆をでっちあげた」¹²¹⁾これら指導者の誤りは、民衆の主権を宣言しさえすれば、それで「ひとりひとりの百姓が一挙に政治的人間になり、半ば自由で半ば奴隸的な混乱した立法を理解し、仕事、すなわち、日毎の糧を抛り出して、新しいシンシナトゥスとして社会事業に従事する」¹²²⁾と考えたことにあったとされる。しかし、民衆を非難することができないように、これらの指導者たちも非難することはできない、とリアリストはいう。なぜなら、彼らとても「自己流のやりかたで民衆を愛している」ことにかわりはなく、「自らの思想のために多くを犠牲にしてきた」のであって、これは「尊敬に価する」¹²³⁾ところである。ただ彼らに批判さるべき点があるとすれば、それは彼らが「植物標本室や博物館で自然の研究」を行っていた初期の生物学者のように、「大都会に住み」「雑誌や書物やクラブ」において、民衆の研究を行なったことが問題だったと彼は言う。そしてこの点について、「われわれは皆多少とも責任がある」¹²⁴⁾と反省してつけ加えている。ここには、革命の挫折という経験をへて、いままでの書物の上ででっちあげた「民衆」についての観念を一切すてて、その実態をあらためて考察してみようという考えが出ている。「民衆とは何か？」とりわけ「民衆とインテリゲンツィアとの関係はどうあるべきか？」という問題は、ラヂーシチェフ以来ロシアの思想界を悩ませてきた中心テーマの一つであるが、四十年代のはじめにもスラヴ派と西欧派はこの問題について論争を交わしている。しかし、それらの論争があとになってみると、いずれも観念の上ででっちあげた民衆像をもとに行なわれていたことが、この時期のゲルツェンにはっきり認識されたのである。ゲルツ

115) VI, 67.

116) VI, 67-68.

117) VI, 80.

118) Там же.

119) Там же.

120) VI, 81.

121) VI, 82.

122) VI, 81.

123) VI, 82.

124) Там же.

ェンの「ロシア的社會主義」の中核をなす「共同体」への着目は、スラヴ主義者とハクスタウゼンに負うものであるが、後者のロシア農民の「実態」に関する研究が、つい最近出版されたことが¹²⁵⁾、以上のような考えに達しつつあったゲルツェンを、あらためて¹²⁶⁾ 惹きつけたことも想像に難くない。

ついで第二の問題たる「知識人のなすべき仕事」について、「中年の男」と「若者」は議論をするが、これは内容的にみて前編におけるゲルツェン自身の内的対話の延長であると考えられる。リアリストたる「中年の男」によれば、「古き世界がもはや回復できず、支えも自信もないということ、誰ひとりそれを愛しているものとしてなく、それが誤解の上に成り立っていることを示す」¹²⁷⁾ ことこそ、いまや民主主義者にのこされた仕事である。彼は「民主主義」というものが「本質的に現在であり」、「闘争であり、身分・階級制度など過去において発達した社会的不正の否定」であって、「自らはなにひとつつくり出すことができない」もので、「最後の敵が滅びてしまえば、民主主義は無意味になってしまう」¹²⁸⁾ と考えている。このような考え方の中に、アナキズムの匂いをかぎつけることは、さしてむずかしくはあるまい。事実「若者」も、「すべての破壊は一種の創造であるという思想」が「この真理にもとづいている」ことを、ただちに見抜く¹²⁹⁾。しかし、またしても彼は、「人は単に破壊するだけでは満足できない」のであって、「それは人間の創造的本性に反する」ことであり、「死を説くためには新生に対する確信が必要」であると主張する¹³⁰⁾。これにたいし、「中年の男」は、古代末期のキリスト教徒にあっては、「教会が勝利を得るであろう、世界は洗礼をうけるであろうとのゆるぎなき確信があつて、それが大きな慰めになっていたが」¹³¹⁾ 現代はこの当時よりも「比較にならないくらいむずかしい」¹³²⁾ 時代であつて、われわれが抱く理想が、はたしてのぞむような形で実現するかどうかは、まったく保証のかぎりではない。なぜならば、「われわれには天国も『神の村』もなく」「われわれの村は人間の村であつて、それはすべて現実的なものが実在するところ、すなわち地上においてこそ実現しなければならない」¹³³⁾ ものであり、さらに「理想とか、理論体系というものは、われわれが心の中で抱くような形では決して実現することはない」ものであつて、基本的には「生は自らに適した場を見出した思想のその面だけを現実化するもの」¹³⁴⁾ だからであるという。

ここにわれわれはゲルツェンの思考において、古代ローマ末期とキリスト教との関係

125) Haxthausen の *Studien über die inneren Zustände, das Volksleben und insbesondere die ländlichen Einrichtungen Russlands* は最初の二巻が 1847 年ドイツ語とフランス語で同時に出版された。

126) ゲルツェンは 1843 年 5 月モスクワでハクスタウゼンに会つて、「親しく話をする機会を持った」が、この時すでにハクスタウゼンは「共同体の原則が太古から保たれてきた重要なエレメントであり、これを時代の要求に応じて発展させることが必要である」と語っている。(II, 281)。

127) VI, 76.

128) VI, 77.

129) Там же.

130) Там же.

131) Там же.

132) Там же.

133) VI, 78.

134) Там же.

ゲルツェンの『向う岸から』について

を、没落せんとする近代ブルジョワ世界と社会主義とのアナロジーとしてとらえる場合に、決定的な相異点が自覚されていることを知るのである。それは当時の多くの社会主義者の中でも、きわめてユニークだったと思われる彼の「未来への確信の否定」である。すでに彼は『嵐の前』で「中年の男」の口をかりて「無限の遠くにある目的は目的ではない。それはトリックなのだ」と言わしめているが、このような態度は以上見てきたように一貫してリアリストの主張に見られる。しかし、ゲルツェンその人の中には、同時に「若者」に代弁させているところの、「未来への確信」がなんとしても棄てきれずにあったこともたしかなところであろう。このような相対立する二つの思想のゲルツェンにおける併存が、以上見たような対話の形を、自分の考えを伝えるもっともよい手段として案出せしめたのであり、それがさらにどのように発展されるかを以下においてわれわれは見るであろう。

V Consolatio

『Vixerunt!』から三カ月たって書かれた本編は、パリ郊外のモン・モランシーのジャン＝ジャック・ルソーの旧居を背景に、二十五、六の黒衣の婦人と、医者である中年の男性との会話の形をとっている。この二人を誰かゲルツェンに関係ある人物と推測して考えることは、いかなる研究者もなしていないが、婦人はおそらくゲルツェンの妻ナターリヤを、医者は友人であるカール・フォークトか、あるいはナターリヤの腹ちがいの兄である「化学者」をモデルにしたものと考えられる。そしてこの「化学者」の系につながる人物として、さらにゲルツェンが1846年はじめに書いた『クルーポフ博士』をあげることもできるであろう。しかしこのようにモデルを推量するよりも、われわれはいままでたびたび見てきたように、これら二人の人物がともにゲルツェンの思想の一面をあらわしていると考えられるほうが、はるかに真実に近い¹³⁵⁾。そしてロマンティストの婦人は、若い日のゲルツェンの思想や、「未来への確信」をすてきれぬ現在の彼の希求を表現し、「いかなる体系も、真理以外にいかなる興味も持たぬ」¹³⁶⁾リアリストたる医師は、これより前に出てきた「中年の男」と同じように、現実を冷静に直視する必要を認識した彼の他の一面をあらわしていると考えられる。

それでは本編において、どのような問題が論じられているのであろうかといえ、前編でとりあげられた「民衆とリーダー」の問題、さらに「信仰を失える現代人のなすべきこと」といったテーマが、またしてもくりかえされているのである。

まずはじめに婦人はルソーと同時代の民衆の関係を話題にとりあげ、いかにこの「人を愛し、解放しよう」とつとめた天才が、同時代人の「たえざる冷遇と傲慢な偏狭と迫害と中傷」¹³⁷⁾によって苦しめられたかを、うらめしげに述べる。それというのも、民衆はルソーが「自分たちの良心のひそかな苛責を述べたということで彼を許すことができなかつた」¹³⁸⁾からであると、婦人は説明する。彼女はすでに相手の医師が「生」の中に「生理的

135) エリスベルグもこのようにみている。 См. Я. Эльсберг, Герцен, жизнь и творчество, М. 1956, стр. 279-280.

136) VI, 98-99.

137) VI, 87.

138) Там же.

興味」しか求めない、客観主義的なリアリストたることを知っているが、前のロマンティストの「若者」と同様に、「一般的なことから離れて」「心が問題になる」と、冷静に観察することに「魂が不満を感じはじめる」¹³⁹⁾と告白する。彼女にしてみれば、民衆が「あらゆる予言者に殉教の冠しか与えず、その人の死後になって無益な後悔をするということ」が、この上なく「くやまれて」ならないのである¹⁴⁰⁾。

これに対して、「オプテミストでもペシミストでもなく」¹⁴¹⁾、「自然科学者である」¹⁴²⁾ 医者は、『嵐の前』以来たえずリアリストたる「中年の男」が主張してきたように、このような民衆に対する非難やうらみといったものが、民衆の理想化に由来する的外れなものだと指摘する。彼にいわせれば、一般大衆というものは「半分の意識しか持たぬ」「習慣の奴隷」¹⁴³⁾にすぎない。しかし、すぐれた才能をもった人が、これらの人びとと「通常の間人間関係に入ると、均衡が破れる」ことは当然であって、大衆の身長にあわせて作った衣服が「窮屈に感じられる」ところから、両者の間の「摩擦は不可避」になる¹⁴⁴⁾。すると大衆は自分たちの衣服が天才によって軽蔑されたと思いきや、彼らに「石や泥を投げつける」¹⁴⁵⁾ ようになるというのである。したがって「天才が大衆よりすぐれているからといって天才が咎めらるべき」でもなければ、「大衆が天才を理解しないからといって大衆が責めらるべき」でもないとは彼は結論する¹⁴⁶⁾。このことはフランス革命の中における革命のリーダーと民衆の関係についてもいえるとして、彼はつぎのように説明する。ルソーの摘発した社会悪を取り除こうとした人びとが1792年の「モンタニャール」を形成したが、彼らはいずれも「フランス国民のために働いたあとで」「非業の死」をとげる破目になった。民衆が彼らをギロチンにかけることを許したからである¹⁴⁷⁾。それならこれは「忘恩」と呼ぶべきだろうかといえ、いや、そうではない。これらの革命家たちは「抑圧されている大衆を見て苦しみ、その奴隷状態に侮辱を感じて」¹⁴⁸⁾、そのような苦しみや侮辱を取り除こうとして立ちあがったのであり、結局彼らが解放しようとしたのは自分自身なのだから、別に感謝されるいわれはない、というのである。このように革命と民衆との関係を指摘したあとで医者は、つぎのような「民衆観」を披瀝するが、かかる見解が19世紀の中葉に一人の革命思想家によって記されているということは、特筆に値しよう。すなわち医者にいわせれば民衆というものは「きわめて愚劣な社会生活の窮屈な枠の中でも、水の中の魚のように平気」でくらしているものであって、このような輩が自由や「*contrat social*」を自ら欲するとは考えられない¹⁴⁹⁾。彼らは本質的に「家庭の人」であって、毎日の生活の営みに忙殺されており、食料が欠乏すれば暴動も起こすかもしれないが、「プロレタリアー

139) VI, 88.

140) VI, 88-89.

141) VI, 89.

142) VI, 100.

143) VI, 90.

144) VI, 91.

145) Там же.

146) Там же.

147) VI, 96.

148) Там же.

149) Там же.

とも、もう少し豊かだったら、共産主義について考えることもなかったことだろう¹⁵⁰⁾ というのである。

このような医者の方衆観に対して、婦人は、なるほど大衆は傑出した天才の思想や高度の学問は理解できなかったかもしれないが、彼らの中には「真理に対する多大の共感」とでもいうべきものがある、それ故にこそキリスト教のすぐれた点を見抜いて、これに帰依したのではなかっただろうか、と反論する¹⁵¹⁾。

しかし医者の方衆観では、キリスト教は血なまぐさい数百年にわたる戦いのあとで、すっかり変質してしまい「福音書の解放の精神は抑圧的なカトリシズムに変わり、愛と平等の宗教は血と戦の教会になってしまった」¹⁵²⁾。そしてその理由の第一は、方衆の中にある慣習的なものの方衆観や、伝統的な生活様式がきわめて根強いものだったこと、さらに第二として使徒と信徒、リーダーと方衆の間の「発達の相異」が考えられる。これらリーダーは、「他人が信じるようになるためには、自分自身が信じさえすればそれで十分だと思っていた」¹⁵³⁾が、これはまことに勝手なひとりよがりであったし、他方大衆は大衆で「すべて不可解なこと、愚かなこと、神秘的なことは理解したが、明らかで単純なことは何ひとつわからず」「良心を縛りつけるものは受け入れたが、人間を解放するものは何ひとつ採用しなかった」のであった¹⁵⁴⁾。では方衆における伝統的な生活様式とは何かといえば、それは服従と隷属にほかならない、と医者は言う。そしてこれは、もともと「人間が服従を好むものであり、たえず何かに寄りかかろう」とするところから来ていると彼は説明する¹⁵⁵⁾。このような医者の方衆観が、後にドストエフスキーによって取りあげられ、さらにそこからさまざまな思想史上の問題が展開されることは、勝田氏がそのすぐれた論文の中ですでになしたところである¹⁵⁶⁾。『Consolatio』の中の医者は、「真理は少数のものに属する」と断じ、大衆の中に「伝統に根ざすせまい理解、善に対するささやかな志向と、悪に対するささやかな秘められた意図」¹⁵⁷⁾を見てとるのであるが、同時に彼らの中にある「動物の本能のように、ほとんど常に的確な」「志向」とか「一般的感応」をも理解する。そして彼は、それらが「大衆の中では個々の人間のあわれな独自性が消えてしまう」からであると、大衆の「没個性」によって説明する¹⁵⁸⁾。しかるに彼は「自由で才能があって力強いすべてのものが到達せんとするあらゆる魅力」が、「独立せる個性の発達をもたらすもの」¹⁵⁹⁾であることも十分に理解している。ところでゲルツェンがその「ロシア的共産主義」を形成してゆく過程でもっともふかく悩んだのは、この「独立せる個性」と将来の共産主義的「共同体」との関係であった。彼は、その思想のレジюмеとも言うべき一節の中で

150) VI, 97.

151) Там же.

152) VI, 98.

153) Там же.

154) Там же.

155) VI, 99.

156) 勝田吉太郎「ドストエフスキーにおけるスラヴ主義の誕生」、『近代ロシア政治思想史』、第15章。

157) VI, 102.

158) Там же.

159) Там же.

「共同体を保持し、個人に自由を与え、共同体とヴォーロスチの自治を都市に、全国に普及すること、そして国民的統一を保ち、個人の権利を発達させ、土地の不分割性を保つこと」¹⁶⁰⁾が不可欠であると主張しているが、この中にも、ゲルツェンの意図がどこにあったかがにじみ出ていると言えよう。

しかし、以上のような医者の見解は、決して婦人を納得させるものではなく、彼女にしてみれば、医者は「罪状を述べるだけで」「判決は裁判所に委ねている」¹⁶¹⁾ 検事に似ている。しかし世の中には「もっと先まで進んで、犯罪を根絶しようとしている人もいる」¹⁶²⁾ のであって、単に「不毛な批評」¹⁶³⁾ で終ることは我慢ならないのである。このような彼女の考え方は、前に見た「若者」と軌を一にする。これに対して、医者は「中年の男」と同じ答をする。すなわち、それらの人びとは自分たちの理想や未来に対する確信があったが故に、たしかに苦しみはしたが、同時に「慰め」もあったのだと¹⁶⁴⁾。しかし、彼にしてみれば「どうして神を信ずることが笑うべきことで、人類を信ずることがそうでないのか」、「なぜ神の国を信ずることがばかげたことで、地上のユートピアを信ずることが賢明なのか」¹⁶⁵⁾ わからない。彼とてもこのような人類や未来に対する信仰が、「有効なもの」で、「歴史における運動と発展と情熱の偉大な源泉」¹⁶⁶⁾ であることはよく心得ているが、そのような信仰が決して未来を保証するものでないことを「この目でしっかりと見た」¹⁶⁷⁾ 現代人に、それを押しつけることはもはや不可能であるという。それではこのような信仰を持ちえぬ現代の知識人にとって残された仕事はいったい何か？ ここにおいて彼は「キリスト教初期のローマの哲学者」の状態が、自分たちと「ずいぶん似ている」と考える¹⁶⁸⁾。これらローマの哲学者の場合も「真理を明瞭に、他の人よりもよく理解していると確信しながら」「崩れゆく世界と確立しつつある世界」のどちらにも属することができず「悲しい目」でじっとそれらを見つめているほかなかった¹⁶⁸⁾。そして彼らは「二つの世界の一つが完全に崩壊するまで堂々と誇りをもって待ちうけ」「冷静に、自らの運命に超然として死んでいった」のであった¹⁶⁹⁾。しかしてこれらの人びとの唯一のささやかな幸福というのは「自分たちが真理を恐れず、ひとたびそれを理解したからは、それに堪え、忠実でありつづける力を見出したという安らかな良心と慰めとを自覚していた」¹⁷⁰⁾ ことであった。そしてもしこれに付加えるならば、「自分たちと同じように考え、自分たちに共感を寄せている人間が必ずいるという確信」¹⁷¹⁾ があげられよう。かくて本編の題は『*Consolatio*』(なぐさめ)となっているのである。この医者気持はたしかにゲルツェンその人の気持をあら

160) XII, 156. (*La Russie et le vieux monde*), (アンダーライン引用者).

161) VI, 102.

162) Там же.

163) VI, 105.

164) VI, 103.

165) VI, 104.

166) VI, 105.

167) Там же.

168) Там же.

169) Там же.

170) VI, 106 (強調—引用者).

171) Там же.

ゲルツェンの『向う岸から』について

わしているといっただいである。しかしこのような「なぐさめ」にとどまってしまうたら、そこに社会主義の提唱がありえないこともたしかである。この謎をとくためにも、前々から指摘しているように「若者」や「婦人」に代表される「行動」への内面からの衝動、「なま身の人間の欲求」といったものをも、ゲルツェンその人のものとして理解することが必要なのである。

VI 1849年へのエピローグ

「……あるときわたしは、暗く不快なチューリッヒで、悲しい思いにふけりながら、母の家の食堂に腰をおろしていた。それは1849年12月のことだった……行く手のすべてが暗いものに思われ、わたしは何かを恐れ、そしてたえがたい気持であった。もしできることならひざまづいて泣くか祈るかしたかった。しかし、それはできなかった。そして祈りかわりに、わたしは自分の呪いを——わが『1849年へのエピローグ』を書いた。」¹⁷²⁾

後年になってゲルツェンは、本編の執筆の思い出をこのように『過去と思索』の中に記している。全編の調子は『嵐のあと』と同じように暗く、パセティックである。そこには事態を冷然と高みから見下すリアリストではなく、革命の挫折を悲しみ、裏切り者を呪う者の絶望的な姿が見られる。革命のさなかにたおれた人びとは、まだ幸せであった。なぜなら彼らは「人間を信じ、死に価する何物かがあると信じていた」¹⁷³⁾からである。しかし、今や積極的に革命に参加することもなく、生き残った者は、何を信じ、何をなすべきだろうか。またしてもここにおいてゲルツェンは、前編でとりあげた「革命と知識人」の問題をとりあげるのである。

彼はふりかえってみて、「自分自身の世代を恥ずかしいと思う。」なぜなら自分たち知識人は「ある種の口舌の徒であり」、「言うことははげしい言葉に満ちているが、現実に対してはいかなる影響力も持っていない」¹⁷⁴⁾余計者だからである。われわれはすでにゲルツェンが作品『誰の罪か?』等において、このような現実に対して影響力を持ちえぬ余計者タイプのインテリゲンツィアを描いていることを知っているが、彼はこのような知識人が革命の中でもいぜんとして「高み」の観客でいることに批判の目を向ける。しかし、ここで強調しなければならないことは、このような知識人を描くとき、彼ははっきり一人称で書いているということである。「われわれはいやらしいほど分別があり、すべてを高みから見下し、あらゆることに耐え、普遍的なものとか思想とか人類とかいったものだけに、かかずらっている」¹⁷⁵⁾と。したがって、この批判は他人に向けられただけでなく、ゲルツェン自らにも向けられたものであることを確認する必要がある。

それではなぜこれらの知識人が「思想的にも弱く」「自分の仕事に対する確信」が持てないのか、といえ、彼らがまだ若い学生時代から「かの文学者や観念論者」によって「思想の上の放蕩」をさんざん吹きこまれ、「情熱によってではなく、情熱的な空想によ

172) X, 117.

173) VI, 108.

174) Там же.

175) Там же (強調—原文).

て疲れきってしまった」からであると彼は説明する¹⁷⁶⁾。しかし、これは「彼らの罪」というよりは、「全世界が死なんとするときに生まれついたことの不幸」¹⁷⁷⁾なのであって、このような現実に対して力を持ちえぬ知識人の存在を、ゲルツェンは近代社会がまさにその生命を終えんとすることから来ていると言う。ここから出発して彼は、「痩せ衰えたヨーロッパ」が「その貧弱な生命を使い果たした」あとに「ふたたび春」が来て、「墓石の上には花が咲く」ことであろうが、世界史の第一巻たる古典時代、そして第二巻たるキリスト教の時代につづくこの第三巻の「主音」は「社会主義に属するもの」であろうという。しかし、彼はマルクスや当時の多くの社会主義者のように、これをもって全世界史の完結とは考えない。なぜならこの「社会主義」も、その極限にまで到達したら、「今日保守主義が占めている位置を占めるようになり」「またしても革命的少数者の巨人の胸から否定の叫びが湧き起り」「将来の、われわれには未知の革命によって打ち敗られるであろう」¹⁷⁸⁾からである。ゲルツェンはこのような歴史のいとなみを、「これこそ死の如く無慈悲で誕生の如く抗し難い、生の永遠のたわむれ、歴史の *corsi e ricorsi* (潮の干満) であり、*perpetuum mobile* (恒久運動) なのだ！」¹⁷⁹⁾と言っているが、このような見方が18世紀始めのイタリアの歴史哲学者ヴィーコに由来するものであることは、『嵐の前』における「若者」の発言¹⁸⁰⁾からも知ることができる。人間の歴史を「理想の実現」に向かっての一直線の進歩としてとらえることを拒否した彼が、人間社会の「有機的」性格をはじめとらえたヴィーコにひきつけられた事情は、後年親交を結びに至るフランスの歴史家ミシュレーの場合¹⁸¹⁾に似ていると言えるかもしれない。

しからばこの「過ぎ去りゆく世界」の中であって「五種類もの新聞を読むことなしには一朝もすごせぬ」¹⁸²⁾知識人たちは、遠い社会主義の「主音」を聞きながら、現に何をなしたらよいのだろうか。「われわれは二つの世界のいずれにも属することなく、それらを結びつける最後の鎖なのだ……一方の側の老衰も他方の側の若さも共有せぬ故に、余計な人間なのだ。どのテーブルにもわれわれの坐るべき場所はない。過去を否定し、未来について抽象的な設計図しかもたぬわれわれは、いずれの側にも相続すべき財産を持っていない。そしてこれが同時にわれわれの強さと不必要性とを証言している。」¹⁸³⁾とゲルツェンは自分たち知識人のおかれた位置を描く。ただ一つ言えることは、現に「はるか彼方」(ロシアで、あるいは社会の底辺)で人びとが苦しみ、「呻き声」をあげているのに対して、「わざと知らぬふりをして沈黙を守り通すこと」は「不可能」¹⁸⁴⁾だということである。それならば、「自分たちの言葉をひびかせようではないか！」と思うのだが、しかし「誰に話し

176) VI, 109.

177) Там же.

178) VI, 110.

179) Там же.

180) VI, 32.

181) Cf. Edmund Wilson, *To the Finland Station: A Study in the Writing and Acting of History*. N. Y., 1940.

182) VI, 114.

183) VI, 113.

184) VI, 114.

ゲルツェンの『向う岸から』について

かけるのか？……何について語るというのか？」まだゲルツェンは「じつのところ知らない」。「ただ、そうしなければならぬという気持がわたし自身より強いのだ……」¹⁸⁵⁾ という言葉でこの『1849年へのエピローグ』は終わっている。しかし彼はこのように書きながらも、すでにこの年の一月から二月にかけて《La Voix du Peuple》誌上に《La Russie》と題する一文を寄せ、ヨーロッパの知識人に向けて、みずからのロシアの現実と未来とを語っているのである。そしてさらにこの文章を書いた三年半後にはロシアの「人民の眠っている意識を呼びさます」¹⁸⁶⁾ べく、ロンドンに「自由ロシア出版所」を創設して、ロシアのインテリゲンツィアに向けて、革命について語りかけるようになるのである。つまりこう書きながら、ゲルツェンにはすでに自分のなすべきことが、わかりかけていたということができるのである。

VII ヴァルデガマス侯ドノゾ・コルテスとローマ皇帝ユリアヌス

この一編は『向う岸から』全八編の最後に位置するが、第VII編よりも前に書かれ、さらに第VII編が内容的に全編の総括、しめくくりの役をしているので、先にみることにする。

題名にでてくるドノゾ・コルテスは、スペインの侯爵で駐仏大使もつとめ、かつてリベラルな政治家であったが、1848年の革命後、極端な反動となった人物である。彼は1850年1月30日にマドリッドの議会で演説を行ない、社会主義に抵抗するものとしてのカトリック的原理を鼓吹したが、これは当時の王統派とカトリック系の新聞に大々的にとりあげられ、「異句同音」の賞讃を博したといわれている¹⁸⁷⁾。

彼は現代ヨーロッパが「さけることのできぬ宿命的な大動乱の前夜にある」ことを見てとり、秩序の回復をとらえ、「もしイギリスがカトリックに復帰するならば、全ヨーロッパは教皇と君主権力および軍隊によって救われるだろう」と主張した¹⁸⁸⁾。このような「現代の社会生活の形態が唯一のものであると確信している」¹⁸⁹⁾ ドノゾ・コルテスの立場をゲルツェンは古代ローマの没落期の保守主義者にくらべる¹⁹⁰⁾。そしてこれらローマの保守主義者がキリスト教徒を攻撃したやり口を見てみると、現代の保守主義者の社会主義者に対する攻撃の仕方にいちじるしく近いということもわかると彼はいう。「不道德だとか、ばかげたユートピアだとか、キリスト教徒は子供を殺したり、大人を墮落させるとか、国家や宗教や家庭を破壊するもの」¹⁹¹⁾ だとかという当時の非難をいま読みかえすと、あたかも今日の保守系の新聞の社説を読んでいるような気がする。彼は書いている。それならば、その後のローマの保守主義者とキリスト教徒の関係はどうなったかとゲルツェンは問う。人も知るように「秩序と宗教と国家の最大の擁護者たるディオクレティアヌスは、万策がつ

185) Там же.

186) VI, 16.

187) VI, 135, 511.

188) Там же.

189) VI, 136.

190) Там же.

191) VI, 141.

きたのを見てとり、この不穏な宗教に対し、恐るべき打撃を与えんと決心し」「剣と火とをもってキリスト教徒に襲いかかった」が、しかし所詮これらの手段も「来るべき時が至った時の言葉に対して、いかに無力かということをはっきり証明した」にすぎなかった¹⁹²⁾。そして最後には、ローマ時代の「もっとも賢明な反動たる背教者ユリアヌスをして、あの有名な絶望の叫び、『ガリラヤ人よ、汝は勝てり！』をあげさせたのであった。」¹⁹³⁾と一文を結んでいる。

ゲルツェンはこの一編を自分が共同出資していたプルドンの『人民の声』紙の1850年3月15日号にのせた。古代ローマ社会とキリスト教との関係を、近代資本主義社会と社会主義との関係になぞらえる彼の青年時代からのお好みのテーマについて、古典に対する教養と、独特な雄弁、それに軽妙な筆の運びをもって叙したこの一編は、彼のジャーナリストとしての才能をヨーロッパの知識人に知らしめると同時に、時事的な問題をとらえながら、それを単なる時事問題に終らせぬ、歴史哲学的内容をもったすぐれたものになっている。しかし「はじめに」も述べたように、この一編は執筆の経過からしても、『向う岸から』の附録と考えるとよいもので、この中ではそれほどふかい議論はなされていない。

VII Omnia mea mecum porto

『向う岸から』全八編の最後に書かれた本編は、1850年4月に稿が成り、最初ドイツの雑誌「Deutsche Monatsschrift für Politik, Kunst und Leben」に“Eine freundschaftliche Admonition”（『友情ある警告』）と題してドイツ語で発表された。『向う岸から』に含まれたのは、1855年のロシア語版からである。

われわれはすでに『嵐の前』から始る一連の対話において、あるときは「中年の男」の口を通して、あるときは「医者」の意見によって、自然を見るように、ロマンティックな夢はすべて冷静に生を、歴史を、人間社会を見つめるようにとの「忠告」をみてきたが、ここにおいても「今や涙をぬぐって男らしく周囲を眺め」「たとえそこに何が見えようと」「われわれは耐えなければならぬ」¹⁹⁴⁾し、「たとえわれわれを取りまく世界が亡びようと、その中に救いを見出しうるような、独立した自主的な生活を始めるよう」¹⁹⁵⁾にとの「忠告」を聞くのである。

つぎに本編の題であるが、これはキケロの『パラドクサ』の中の言葉であって、その意味は「われはわがすべてを自らと共に運ぶ。」ということであるが、さらにそこから転じて、「わたしの知力がわたしの最上の所有物である。」という意味にもなる。本編においてゲルツェンは人間の歴史を三つに分けて、(1)人間が共通の仕事において自由だという時代。「この時代には精力的なすべてのもののめざしている活動が、彼の生きている社会の志向と一致している。このような時代にあっては——それはかなりまれなのだが——すべての人はいろいろな事件の渦巻の中に身を投じ、その中で生き、苦しむ、喜び、死ん

192) VI, 142 (強調—原文).

193) Там же.

194) VI, 117.

195) VI, 131.

でゆく……このような時代に自己犠牲や献身について語る必要はない……なぜなら皆確信をもっているからだ。」¹⁹⁶⁾ (2) 個人と環境との関係が、以前の大変革で決ったように続いているきわめて平凡な時代。「このような時代においては、個人と社会の関係はそれほど問題にされない。認められた諸関係が習慣や人間の無頓着や怠惰や、批判と皮肉の悪魔的精神の欠如の上にとっかと腰をすえて、ゆるぎないものとして存在する。人びとは個人的な関心事や、家庭生活や、学問や、産業に余念ない暮しをし……子供たちの未来のために一生懸命働き、子供は子供でその子らの未来のために生活を保証してやろうとする。」¹⁹⁷⁾ (3) 生きながらえた社会の諸形態が亡びゆく時代。「これはきわめてまれだし、この上なく悲しい時代である。」人びとは「自らが軽蔑する過去とも、また別の法則によって発展してゆく未来とも、ひとしく切り離されている。個人が社会と衝突するのは、まさにこのような時代においてである」¹⁹⁸⁾と分類している。われわれはすでに前編までにおいて、ローマ末期＝キリスト教初期の時代と、近代ヨーロッパ社会とのアナロジーに関するゲルツェンの考えを見てきた。彼がこれらの時代をもって、第三の時代と考えていたことは言うまでもない。ところでさらにこの時代について彼は本編の末尾で「われわれは、ある時代においては人がその環境に身をまかせるのがきわめて容易であるのに、他の時代には、自分のもはすべてわれとわが身につけて、そこから立ち去ることによってのみようやく自己の環境とのきずなを保つことができるということを見てきた。」¹⁹⁹⁾と記している。つまり *Omnia mea mecum porto.* とは、かかる第三の時代における人間の生き方をさしている。このような激動する変革期にあっては、地位とか財産はもとより、慣習とか道徳とか、既製の観念といったものまでが頼りにならなくなってしまふ。人がぎりぎりの場において最後のよりどころとするのは、自らの身につけたところの知力とか判断力とか勇気でしかない。本編は『向う岸から』の最後の総括に当るものであるが、ここでゲルツェンが、かかる題をえらんだことは大いに意味あるところである。

まずこの編の冒頭にゲルツェンは、*Ce n'est pas Catilina qui est à vos portes—c'est la mort.* (君たちの戸口にいるのはカティリーナではない——それは死なのだ。) というプルードンの一句をエピグラフとして掲げている。これは近代社会がすでに死のまぎわまで来ていることを比喩的にあらわした表現である。もはや事態は明瞭である。「船を見すてて」「自らを救うか」、それとも船に残って、船とともに「滅びる」か、二つに一つである。それなら「船を見すてよう」とゲルツェンは言う。だがこれは決して「逃避」ではない。なぜなら人には「留まる権利も立去る権利も」あるのであって「問題は逃避か否かではなく、人は自由か、そうではないか、ということだ」²⁰⁰⁾と彼は、ここに本編の主題たる「自由」の問題を提出している。

われわれはすでに『嵐の前』において、「中年の男」の口を通して、歴史における目的論の否定を見てきた。そこでこのリアリストは、歴史には脚本がないこと、未来は偶然

196) VI, 120-121.

197) VI, 121.

198) VI, 121-122.

199) VI, 130 (強調—原文).

200) VI, 111.

的な諸条件と人間の意志との総和であるとの考えを述べていたが、本編でゲルツェンはさらにつきのように書いている。

「人間は普通考えられている以上に自由なものだ。人は環境に左右されるところが大きいが、それほど環境に隷属しているものでもない。われわれの運命の大部分は、われわれの手の中にあるのだ。」²⁰¹⁾

そしてさらに、本編の末尾近くでは、「個人と社会の歴史的関係を変えることはわれわれの勝手にできるものでもないし、また不幸にも社会そのものの意のままになるものでもない。しかしわれわれが自分自身の発達に適合した現代人たりうるか否か、一言でいうならば、われわれの行為を環境に即して創造しうるか否かは、われわれ自身にかかっているのだ。」²⁰²⁾

『嵐の前』のリアリストは、歴史は即興的なもので、あらゆる偶然を利用し一度に何千という扉を開くが、どれが開かれるかは誰にもわからないといていたが、²⁰³⁾ ここにおいて創造的な人間の自由意志がゲルツェンその人の口から語られるのである。このようなゲルツェンにおける自由意志の主張は、そもそもの出発点を彼の最初の著作たる「自然における人間の位置について」(1832)にさかのぼることができる二元論の批判と克服にもとめることができよう。²⁰⁴⁾ 彼はこの二元論を近代ヨーロッパ文明と、さらにはその支柱たるキリスト教思想の根本原理と見るのであるが、この「二元論の主なやりくちというのは、たとえば肉体と精神といった実際には分けることができないものを想像上の対立物として分けたり、このような抽象的観念を敵対させたり、さらには分かちがたく一つのものとして結びついているものを人為的に和解させたりすること」²⁰⁵⁾である。ところで「あらゆる宗教は恭順の上にそのモラルをうち立てた」が、この恭順というのは、個性の否定である。しかして「矛盾の宗教たるキリスト教は、あたかも贖罪や教会や天なる父の前で個人をよりおごそかに犠牲に供するために、一方では個人の尊厳を認めた。そしてこのような見解は風習の中にも滲透し、精神の隷従の全体系の中で具体化するとともに、歪んではいるが自分自身とはまったく矛盾せぬ弁証法の中で形づくられていった」²⁰⁶⁾。かくて「われわれの言語は二元論の言語であり、われわれの想像力はその他の比喩や隠喩を持っていない」²⁰⁷⁾のである。このキリスト教の神学(テオロジー)には、地上に神の王国がうちたてられることをもって人類の歴史の究極的到達点と考える目的論(テレオロジー)が存する。そして人間をこの目的達成のための手段と考え、幸福な未来を約束することによって、現在に犠牲を強いるものである。しかしてこのようなキリスト教的目的論に、観念論が「加担する」。「キリストが人類の罪をつぐないながら肉体を無視したように、二元論においても観念論は物質に対して精神に、個人に対して種に独占を与えることによって、個人を国家の

201) VI, 118-119.

202) VI, 130-131 (強調—原文).

203) VI, 31.

204) I, 20.

205) VI, 126.

206) VI, 125.

207) VI, 127.

犠牲に供し、国家を人類の犠牲に供」²⁰⁸⁾ することになるのである。したがって「個人が社会や民族や人類や理念に従属するという事は、人身御供の継続であり、神の怒りをやわらげるための羊の生贄であり、罪びとの罪をあがなうための罪なきもののほりつけである。」²⁰⁹⁾

ゲルツェンはこのように当時の思想家や革命家の主張の根底にある二元論をあげてみせる。そしてこのような二元論の迷いからさめて、個人と社会の問題をもう一度根源にまでさかのぼって考えてみることを提唱する。

いままでの歴史をふりかえってみるならば、「社会の真の、現実のモナドたる個人はつねに何らかの一般概念や集合名詞や旗印の犠牲になってきた。」²¹⁰⁾しかしここで人は、はっきり目をさまして問わなければならない。人は「いったい誰のために働き、誰がそれを利用してきたのか、個人の自由を否定しながら、誰が解放されたのか」と²¹¹⁾。われわれは何百年来、隣人を愛するように、祖国を愛するようにいわれてきた。そしてあたかもエゴイズムが悪徳であるかのように教えこまれてきた。しかし「エゴイズムとは何か？——隣人愛とは何か？——個人主義とは何なのか？——そしてまた人類愛とはいったい何なのか？」²¹²⁾あらためてゲルツェンは問いなおすのである。抽象的な存在としてではなく、なま身の「人間はエゴイストである」とゲルツェンは言う。「なぜなら人間は個人だからだ」²¹³⁾。「われわれはエゴイストである。だからこそ独立や安楽や自分の権利の承認をえようと努力するのだ。またわれわれが愛を渴望し、行動を求め……あきらかにわれわれに反するものでない限り同じ権利を他人にも拒絶することのできない理由はここにある」²¹⁴⁾と彼はいう。ゲルツェンがこのように考えるのは、彼が「エゴイズムとか社会性とかいったものは美徳でもなければ悪徳でもない。それは人間生活の基本的要素であって、それがなかったら歴史も発展もなく、そのかわり野獣のぼらぼらな生活か、あるいはおとなしい穴居人の群れがあったことだろう」²¹⁵⁾と考えているからにはほかならない。しかしエゴイズムの中には、「偏狭で、動物的な、不潔なエゴイズム」²¹⁶⁾があるのもたしかであり、また「社会的存在としての人間は(他を)愛そうとする」気持があって「このことに命令はまったくいらぬ」²¹⁷⁾。したがって「大切なのは(エゴイズムと隣人愛という)この二つの譲渡できぬ要素を、自由に調和的に結合することだ」²¹⁸⁾。それでは、そうするためにはどうしたらよいか？ ここにおいてゲルツェンは「一般的な解決」など存在しない、とはっきり言い切る。「個人と社会との間の調和は、一度ですっきりと確立するといったものではない。それは各時代ごとにほとんど各国ごとに作られ、すべて生きとし生けるものと同様に、環境とともに変わるも

208) VI, 126.

209) VI, 125.

210) VI, 126.

211) Там же.

212) VI, 129 (強調—原文).

213) Там же (強調—原文).

214) Там же (……原文).

215) VI, 130.

216) Там же.

217) Там же (かっこ内は引用者).

218) Там же (かっこ内は引用者).

のだ。そこには一般的規準とか、一般的解決とかいったものはありえない。」²¹⁹⁾

この「個人と社会」との関係の問題こそ、ゲルツェンが生涯かけて追求した主たるテーマであり、さらにそれは、西欧主義とスラヴ主義者の論争に始って、以後19世紀のロシアの思想界を悩ませつづけた問題である。そしてゲルツェンのユニークさは、この問題について「一般的解決」などありえない、と観念論的な議論に明けくれている友人や論敵の蒙をひらくだけでなく、以下にみるような一つの積極的な態度を示している点にこそある。

彼は個人と社会との従来認められてきたような関係に対する疑惑や抗議といったものが、けつして「軽々しく人間の胸から発せられたものではない」²²⁰⁾という。「このような抗議はながい個人的な試練や不幸のあとでとか、人が世界を理解すればするほどそこから離れて行き、自分を外の世界に結びつけているきずなが鎖に変わり、いろいろなできごとや大衆の考えに自分が反対するのが正しいのだと感じ、また自分が自己の属している大家族の一員ではなくて、敵であり異邦人であると自覚するといったような、重く苦ししい時を経たあとで、はじめてなされたものだ。

われわれの外側では、すべてが変化し、揺れ動いている。われわれは断崖の端に立って足許の崩れるのを見ている。夕暮は迫り、空に導きの星はひとつも見えない。われわれが寄るべき港を見出すのは自分自身の中だけであり、自らの限りない自由と何ものにもおかさぬ独立の自覚の中だけなのだ。このようにして自分自身の救済を求めながら、われわれは——もし人間にとって社会の中の自由な生活の発展というものが可能ならば、それを許す唯一の——堅固でひろびろとした地盤の上に立っている。」²²¹⁾

このような、個人が自らの意志の力や選択のリアリティーや行動の可能性を実存的に自覚しているが故に人間は自由なのだというゲルツェンの考えを、マリアは「今日では一種の実存主義と呼ぶことができるかもしれない」として、マックス・シュティルナーやキェルケゴールを想起している²²²⁾。われわれはすでに『嵐の前』において「中年の男」の口から「一人の人間の死は全人類の死に劣らず不条理なものだ」という言葉を聞いたが、このような「生」におけるいかなる究極的ゴールをも拒否して個人の実存を本質に先立つものとして主張する考えは、現に生ける人間の自由意志の絶対的価値の強調や、行為する人間の主体性の確認と相まって、ゲルツェンをして当時の思想界にあってはかなりユニークな存在たらしめていると言えよう。マリアはゲルツェンが1841年から1848年までの短い期間に、ありきたりの宗教的・社会的観念論から、ユニークな実存主義的エゴイズムに移ったと述べているが²²³⁾、すでに見たように、このプロセスは正しくはそれ以前にさかのぼる二元論のジンテーゼという目的から出発しているのである。この意味で『向う岸から』は二元論批判の総決算の書であるということもできよう。そして、この総決算の上に、一つ

219) Там же (強調—原文).

220) VI, 119.

221) Там же.

222) Malia, op. cit. pp. 381-382. Blackham はゲルツェンが社会主義のプログラムをア・プリオリな個人の自由と共に保持せんとすることにおいて、キェルケゴールよりも J.-P. サルトルに近いと考える。Slavic Review, June, 1966, p. 216.

223) Malia, op. cit., p. 382.

ゲルツェンの『向う岸から』について

の「可能性」として提唱されたのが、資本主義を経ずして社会主義へ移行せんとする彼の「ロシア的社会主義」の理論だったのである。

(December, 1968, Sapporo)

Herzen's «*From the Other Shore*»

TOGAWA Tsuguo

Brilliant in the style and original in the thought, Herzen's «*From the Other Shore*» has been regarded as one of his best works. At the same time, this work is the most complicated in its structure and very contradictory in its contents. The whole book can be divided into two parts: the part of dialogues and that of articles. In the first part, the conversation is held between the realists and the romantists. Although Herzen has mentioned in his autobiography, we can not consider the romantic “young man” in the chapters «*Before the Storm*» and «*After the Storm*» as I. P. Galakhov, Herzen's friend, and the realistic “middle-aged man” as Herzen himself. In the chapter of «*Consolatio*», neither “the doctor” nor “the young lady” expresses directly Herzen's own opinion. The two types reflect Herzen's own thoughts and doubts, and he wished to give them an expression in the style of the dialogue. The conversation, therefore, is nothing but his inner dialogue. In order to understand the organic structure of the whole book, and to know the development of Herzen's thoughts, we must analyze in detail the contents of all chapters and the interrelation of them.